

序 文

本書は、平成27年度に、民間の集合住宅建設に伴って発掘調査を実施した南御屋鋪跡の埋蔵文化財発掘調査報告書です。発掘調査では、近世から近現代にかけての遺構・遺物が見つかりました。調査区周辺は、近世中期に、都城島津家第20代当主島津久茂が営んだ南御屋鋪跡に位置しています。今回の調査成果は、近世後期に編さんされた『庄内地理誌』絵図に描かれた屋敷配置とも整合的で、調査地点周辺が屋敷地の北縁部付近に該当することが明らかとなりました。

これら先人の残した文化財を守り引き継いでいくことは、私たち都城市民の責務でもあります。本書を通して、こうした地域の歴史、文化財に対する理解と認識がますます深まる事を願いますとともに、調査で明らかとなった成果が今後の学術研究発展に少しでも寄与できれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査から本書刊行に至るまで、事業主である福本晃様をはじめ作業に御協力いただいた市民の皆様、関係各機関に心から感謝申し上げます。

平成29年（2017）年3月

都城市教育委員会
教育長 黒木哲徳

例 言

1. 本書は民間の集合住宅建設に伴い、発掘調査を実施した南御屋鋪跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は都城市教育委員会が主体となって、同文化財課主査加賀淳一が担当した。
3. 本書に使用したレベル数値は海拔絶対高で、基準方位は座標北（G.N）である。使用した座標数値は国土座標（世界測地系）に基づいている。
4. 本書の遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・写真的番号は一致する。
5. 土層と遺物の色調は「新版標準土色帳」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に準拠した。
6. 現場における遺構の実測は作業員の協力を得て加賀、文化財課主幹栗畠光博を中心となってこれを行なった。
7. 遺構の写真撮影は加賀が行なった。空中写真撮影は、株埋蔵文化財サポートシステム鹿児島支店に委託した。
8. 本書に掲載した遺構のトレースは株式会社CUBICの「トレースくん」並びにAdobe「Illustrator CS5」を用いて加賀が行なった。遺物の実測・トレースは整理作業員の協力を得て加賀が行なった。
9. 本書に掲載した遺物の写真撮影は加賀が行なった。
10. 本書の執筆・編集は加賀が行なった。
11. 発掘調査で出土した遺物と全ての記録（図面・写真など）は都城市教育委員会で保管している。

目 次

本文 目 次

第1章 序	1	第2節 南御屋鋪跡の基本土層	8
第1節 調査に至る経緯	1	第3節 近世以前の成果	9
第2節 調査の組織	1	第4節 近世から近現代の成果	10
第3節 発掘調査の経過	2	1 挖立柱建物跡・ピット列 (SB)	11
第4節 整理作業の経過	2	2 階段状遺構 (SX)	14
第2章 遺跡の位置と環境	2	3 溝状遺構 (SD)	19
第1節 地理的環境	2	4 土坑 (SC)	23
第2節 歴史的環境	4	5 包含層出土遺物	26
第3章 調査の成果	7	遺物観察表	32
第1節 発掘調査の方法と概要	7	第4章 総括	35

挿 図 目 次

第1図 南御屋鋪跡と周辺の遺跡 (1: 25,000)	3	第15図 SX1出土遺物② (1: 3 1: 4)	18
第2図 調査地点位置図 (1: 10,000)	3	第16図 SD1・SD3実測図 (1: 80 1: 50)	20
第3図 島津久茂像	5	第17図 SD2・SD4・SD5実測図 (1: 80 1: 50)	21
第4図 南之館屋敷図 (庄内地理誌卷26)	5	第18図 溝状遺構出土遺物 (1: 3 1: 4)	22
第5図 幕末都城之図と調査地点	6	第19図 溝状遺構出土遺物② (1: 3 1: 4)	23
第6図 トレンチ配置図・グリッド配置図 (1: 2,500 1: 400)	7	第20図 土坑実測図 (1: 50)	25
第7図 調査区遺構配置図 (1: 200)	7	第21図 土坑出土遺物 (1: 3)	26
第8図 調査区南壁土層断面図 (1: 40)	8	第22図 包含層出土遺物 (1: 3)	29
第9図 SD6・SD7実測図・出土遺物 (1: 100 1: 60 1: 3)	10	第23図 包含層出土遺物② (1: 3 1: 4)	30
第10図 SB1・SB4・SB5実測図 (1: 80)	12	第24図 包含層出土遺物③ (1: 2 1: 3 1: 4)	31
第11図 SB2・SB3実測図 (1: 80)	13	第25図 南之館屋敷図と調査地点の位置関係	37
第12図 挖立柱建物跡・ピット列出土遺物 (1: 3 1: 4)	14	第26図 米軍撮影空中写真 (昭和22年撮影)	37
第13図 SX1実測図 (1: 60)	16	第27図 南御屋鋪跡配置推定図 (1: 2,000)	38
第14図 SX1出土遺物 (1: 3)	17		

挿 表 目 次

第1表 南御屋鋪跡出土遺物観察表①	32	第3表 南御屋鋪跡出土遺物観察表③	34
第2表 南御屋鋪跡出土遺物観察表②	33	第4表 南御屋鋪跡出土遺物観察表④	34

写 真 図 版 目 次

写真図版1	40	写真図版4	43
写真図版2	41	写真図版5	44
写真図版3	42	写真図版6	45

第1章 序

第1節 調査に至る経緯

平成26年12月26日、都城市内の不動産業者より、都城市教育委員会に対して、都城市姫城町3165番1ほか3筆に係る文化財所在の有無について照会がなされた。照会によると工事計画は宅地造成であった。対象地は、周知の埋蔵文化財包蔵地として登録はなされていなかったが、宝暦年間（1751～1764）に都城島津家第20代島津久茂が隠居屋敷として築いたとされる「南御屋舗」比定地に位置していた。このことから、文化財課は、土地所有者の協力も得た上で、当該地において遺跡が残存しているか確認するための試掘調査を実施した。

試掘調査は、平成27年1月15日に実施し、対象地内3ヶ所にトレーナーを設けて、地下の状況を確認した。この結果、2ヶ所のトレーナーから、溝状遺構やピットが検出され、これらに伴って近世の陶磁器も出土したことから、当該期の遺跡が残っていることが明らかとなった。この結果を受けて、文化財課は宮崎県教育委員会への終了報告と同時に、調査地点周辺を周知の埋蔵文化財包蔵地「南御屋舗跡（遺跡番号：MI016）」として新規登録した。

その後、対象地において、鉄筋コンクリート造による集合住宅建設設計画が持ち上がり、その工事計画によれば、建物基礎工は遺跡残存範囲に到達していた。そのため、文化財課は関係者と協議を重ね、計画建物基礎工によって破壊を免れない範囲（295m²）について本発掘調査を実施することで合意した。その上で、土地所有者と都城市が協定・契約を取り交わし、当該地における現場発掘調査、発掘調査報告書作成を都城市教育委員会が受託することとなった。その後、土地所有者より平成27年11月4日付けで文化財保護法93条に基づく発掘届出が提出された。

以上のような経過を経て、現地における発掘調査は、平成27年11月16日に着手し、翌平成28年2月8日に終了した。（実調査日数：47日）

第2節 調査の組織

平成27年度 発掘調査

- ・調査主体者 宮崎県都城市教育委員会
- ・調査事務局 教育長 黒木 哲徳
教育部長 児玉 貞雄
文化財課長 新宮 高弘
文化財課副課長 武田 浩明
文化財課主幹 栗畠 光博
- ・調査担当 文化財課主査 加賀 淳一

平成28年度 報告書作成

- ・調査主体者 宮崎県都城市教育委員会
- ・調査事務局 教育長 黒木 哲徳
教育部長 児玉 貞雄
文化財課長 山下 進一郎
文化財課副課長 武田 浩明
文化財課主幹 栗畠 光博
- ・報告書作成担当 文化財課主査 加賀 淳一

発掘作業従事者

野口清二 竹原安男 有山和美 倉内明信 堀内美利 山下尚子 宮田初子 潤之口藤則 茨木浩一

整理作業従事者

横尾恵美子 水光弘子

発掘調査、整理作業に際して、下記の方々・機関より御指導、御助言を賜った。記して感謝申し上げます。

渡辺芳郎　米澤英昭　都城島津邸（敬称略）

第3節 発掘調査の経過

現場における発掘調査の作業経過については以下の通りである。

平成27年11月16日・19日	重機による表土剥ぎ
11月20日	基準点測量、グリッド杭設置
11月24日	作業員による遺物包含層掘下げ開始
12月中旬～	遺物包含層掘下げが完了、遺構検出・掘下げ
平成28年1月27日	空中写真撮影
1月28日～2月4日	遺構実測・各種図面作成
2月8日	調査区埋め戻し・現場撤収

第4節 整理作業の経過

整理作業の経過は以下の通りである。

平成27年度

出土遺物の水洗、注記、接合

平成28年度

出土遺物の注記、接合、実測・トレース、図面製図、レイアウト・文章執筆、報告書印刷・刊行

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境（第1図）

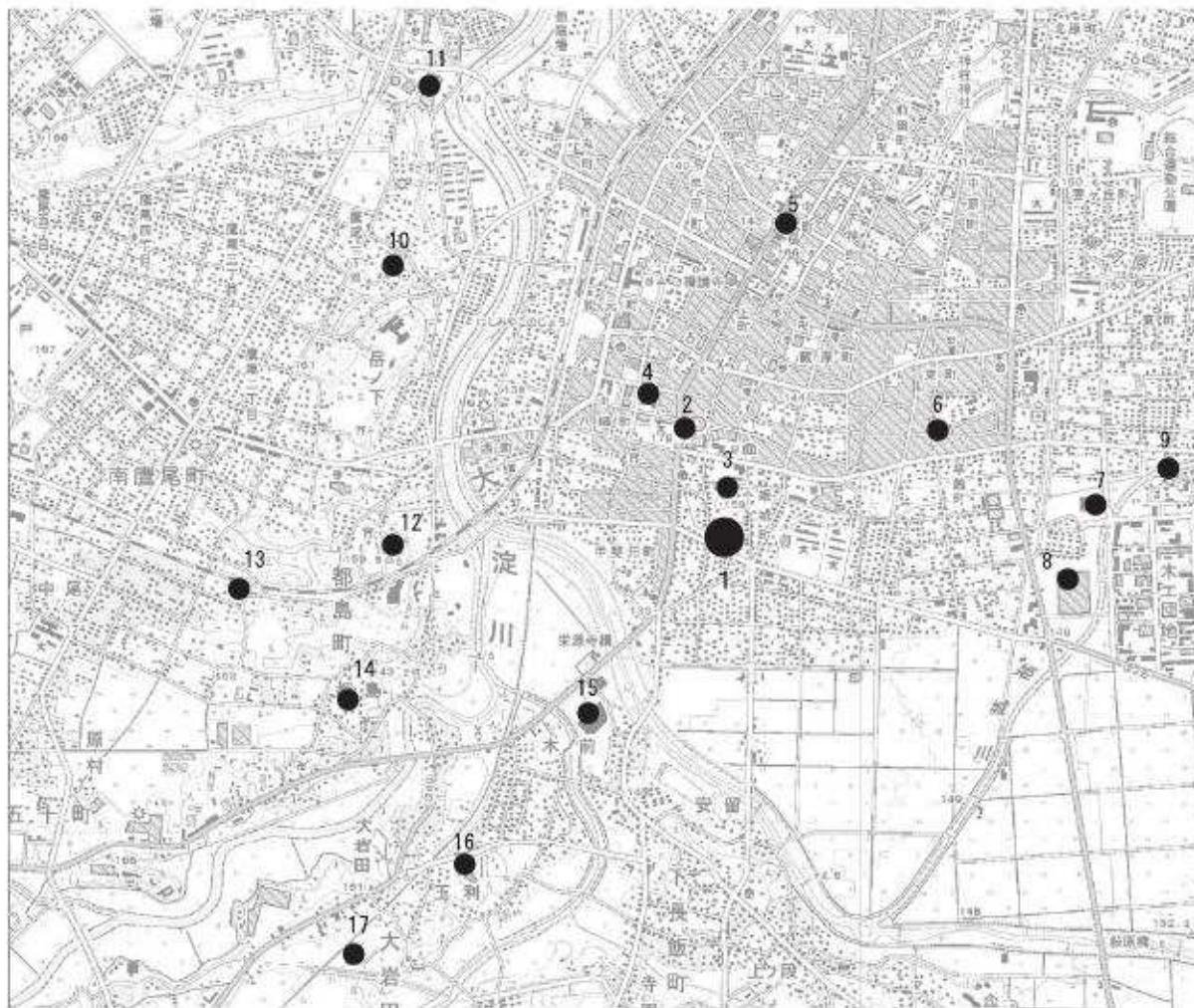
都城市は平成18年1月1日に周辺4町と合併し、平成28年には10周年を迎えた。平成28年現在の人口は約16万5千人を数え、市域面積は約650km²を測る。南御屋鋪跡の位置する都城市姫城町は、都城市的南部に位置している。この地区は、都城市役所を中心とした官公庁や学校、病院等の公的施設が集中しており、当市の中心地となっている。調査地点周辺はこれらより南に広がる住宅街の中に位置している。

当市の地勢的な概略について触ると、市域の大半は、三方を山々に囲まれた都城盆地に属している。盆地は約30,000年前に始良カルデラから噴出した入戸火碎流（シラス）の堆積までは大半が湖であったことが分かっており、同テフラの堆積によって湖は消失し、シラスの侵食を繰り返しながら現在へと続く地形が形成されていく。盆地内の地形は大きく分けると、盆地の中央を流れる大淀川を境として、西にシラス台地地形が発達し、東は鶴塚山系や那珂山地等に端を発する河川によって開析された扇状地地形によって構成されている。

調査地点は姫城川左岸の氾濫源と扇状地の境付近に位置している。調査区の眼前を流れる姫城川は、大きく蛇行しながら西へ流れ、調査地点の西約1kmで大淀川本流へと合流している。さらに南西500mには、やはり大淀川の支流である萩原川が東流しており、先の姫城川との間には扇状地状の微高地が広がっている。調査地点付近はこの縁辺部付近に位置することになる。調査地点周辺の標高は142m台で、調査地点と河川との比高は数m程度である。

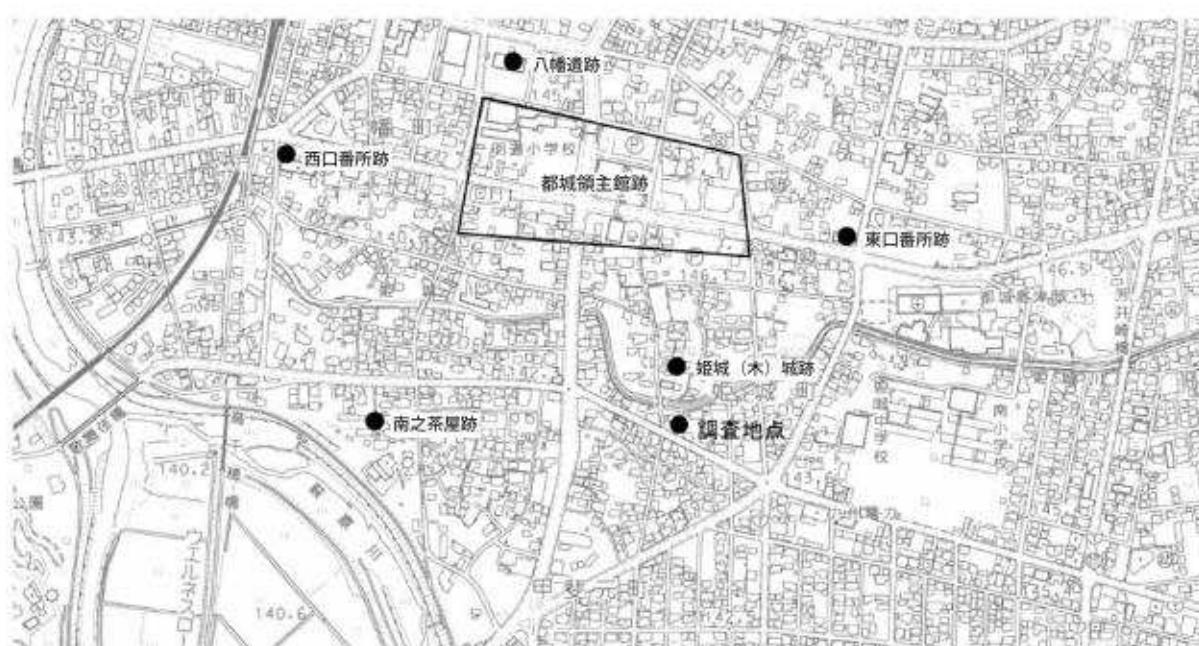
調査地点の基盤層は姫城川に由来すると思われる洪水堆積物である。これまでの周辺地域における試掘調査等の結果によれば、姫城川河岸には洪水堆積物と思われる砂層・礫層が幾層も堆積していることが確認されており、河川からの影響を直接受けやすいエリアであったこともわかっている。

調査地点周辺における旧地形について、昭和20年に米軍によって撮影された空中写真を参照すると、今回の調査区付近と姫城川の間には河岸段丘と思われる段差が写り込んでいる。この段差は、現在は確認できないことから、戦後の護岸工事等により埋立てられたものと考えられる。



1: 南御屋鋪跡 2: 都城領主御路（都城東行跡）3: 線縫（木）塙跡 4: 八幡道跡 5: 中央東流速区遺跡群（中町遺跡・天井遺跡・梅川源遺跡）6: 萩水逆敷跡
7: 幸輪宮田遺跡 8: 高田遺跡 9: 上ノ園第2遺跡 10: 都城古墳 11: 二夕元遺跡 12: 滋（之）塙跡 13: 八幡塙遺跡 14: 濱戸ノ上遺跡（鶴峯寺遺跡）15: 木ノ前塙跡
16: 大岩通村ノ前塙跡 17: 大岩街上村塙跡

第1図 南御屋鋪跡と周辺の遺跡 ($S = 1/25,000$)



第2図 調査地点位置図 ($S = 1/10,000$)

第2節 歴史的環境（第1図）

今回調査した南御屋跡は、近世期の遺跡であるが、調査地点の位置する都城市内中央部と周辺では、これまでに複数の遺跡が調査されている。ここでは遺跡事例を時系列的に取上げながら、概要について触れておきたい。

（旧石器時代・縄文時代）

調査地点の南、大岩田町に所在する大岩田上村遺跡では、薩摩火山灰層（約12,800年前）の下位より後期旧石器時代の細石刃が出土している。さらに、調査地点の北に位置する柳川原遺跡では、縄文時代早期の土器が見つかっている。（弥生時代）

調査地点の南約2kmに位置する黒土遺跡では、縄文時代晚期～弥生時代早期にかけての資料がまとまって出土している。調査地点の南西に位置する大岩田村ノ前遺跡では弥生時代前期の資料がまとまって出土している。高田遺跡は、民間の大規模小売店舗建設に伴って発掘調査が実施され、弥生時代中期の環濠を伴う集落が見つかっている。その高田遺跡のすぐ北に位置する早鈴宮田遺跡では、弥生時代～中近世にかけての水田層が見つかっており、高田遺跡の集団との関わりが想定される。

（古墳時代）

集落の存在を示すものとして、上ノ園第2遺跡、二タ元遺跡において、古墳時代前期の堅穴建物跡が見つかっている。また、先に触れた高田遺跡においても、溝状遺構や遺物包含層から古墳時代前期の土器が出土していることから、周辺において集落域があったことが推定される。都城古墳は、市内南部では事例の少ない高塚墳である。周辺には地下式横穴墓が存在していたとの伝承がある。

（古代）

調査地点周辺における古代（奈良・平安時代）の様相は、発掘調査事例も少なく、様相は不明ながら、上ノ園第2遺跡では、8世紀後半から10世紀前半と想定される掘立柱建物跡等が検出されており、当該期の集落であることが明らかとなっている。調査区の南西約800mに位置する木ノ前遺跡では、8～9世紀代の遺物がややまとまって出土している。掘立柱建物跡も見つかっていることから、当該期の集落が営まれていたようである。このほか、調査地点の南に位置する永田・藤東遺跡において9～10世紀代の集落が見つかっている。

（中世）

調査地点の西約1.3kmには都城島津氏歴代の居城となった都（之）城跡がある。永和元年（1375）、北郷義久による築城以来、元和の一国一城令（1615）により廃城となるまで、都城地域における拠点的な城郭となる。昭和63年以降、本丸をはじめ複数の曲輪で発掘調査も実施されている。築城以後、城郭は改修、増築を重ねており、現在把握されている城域は、太閤検地後、文禄4年（1595）に北郷氏が祁答院へ所領替となり、代わって入った伊集院忠棟によって整備された時期のものとされる。現在では、幾つかの曲輪が破壊されて残存していないが、本丸を中心とした主要な曲輪は残っており、シラス台地を開削して築かれた曲輪は南九州における群郭式城郭の好例となっている。

調査地点よりも姫城川を挟んだ対岸には、姫木城跡がある。現在は削平されていることから、曲輪の構造がわかるような遺構はなく、城郭としての規模も不明である。文献史料には南北朝期の文書に記載されていることから、この時期に築城されている。その後の文献史料には、登場することもなく、廃絶年代についても不明である。

このほか、中世の集落（館城）と思われる遺跡も周辺には点在しており、早鈴町に位置する秋永屋敷跡は、発掘調査等はなされていないものの、現在に残る街区の町割りから一町四方の方形居館である可能性が指摘されている。このほか周辺では、大岩田城跡の存在が知られている。

（近世）

慶長4年（1599）の庄内の乱後に祁答院から所領復帰した北郷氏は、元和元年（1615）の一国一城令の後、都城領主館跡へと移る（「新地移り」）。都城領主館は、現在の都城市役所および市立明道小学校内の範囲（東西約360m、南北約270m）に築かれたとされる。以後明治時代を迎えるまで、石高約4万石の私領地である都城島津領の当主である北郷氏（寛文3年（1663）に「島津」に復姓）の拠点となる。領主館は絵図等から、広大な面積・規模を有していたことが明らかであるが、当該地における発掘調査等は実施されていない。そのため館の具体的な構造等は明らかではない。この領主館を中心として、周辺の微高地上に重臣クラスの家臣団を配置しており、これらを含む城内は老中馬場・御門馬場等の道路によって区画されていた。この城内へと通じる東口、北口、西口の3ヶ所には番所も設置されていた。

近世期の遺跡は、主として都城領主館跡よりも北の地域において発掘調査事例の蓄積があり、八幡遺跡、中央東部地区遺跡群（天神遺跡、中町遺跡、柳川原遺跡）等の遺跡が確認されている。八幡遺跡は、領主館の城域にほぼ含まれている地点で、都城島津家家老級の重臣の屋敷地として比定されている。近代以降の遺構が重複しており、江戸期の遺構の様相は不明瞭ではあるが、井戸跡からは、17世紀初頭の陶磁器が出土するなど、新地移りの時期の資料も出土している。調査地点からは、地山削り出しによる階段状遺構を伴う特殊な土坑等も検出されている。中央東部地区遺跡群は、当市の区画整理事業に伴って複数次の発掘調査が行なわれている。新地移りによって、三重町から移して形成された都城唐人町の一画に該当する地点であり、16世紀以降、近世、近現代に至るまで多種多様な遺構、遺物が検出されている。中でも、柳川原遺跡第5次調査で出土した白磁製中国象棋の駒は、江戸期に渡來した明人の痕跡を示す資料として重要である。

今回発掘調査を実施した南御屋鋪跡は、都城島津家20代当主、島津久茂（第3図）が宝暦7年（1757）に当主の座を退き、築いた隠居屋敷とされ、安永3年（1774）に64歳で死去するまで居住している。その概要については文化・文政年間（1804～1830）に、都城島津家によって編さんされた『庄内地理誌』巻26に記載されている。詳細については、本報告総括の項でも触れるが、同資料中には、南御屋鋪跡の絵図（第4図）も残されている。比較的簡略化して描かれているものの、主だった建物や庭園、門、堀等の配置がわかる。絵図によれば、屋敷は姫城川の左岸に近接した位置に築かれており、正門と考えられる御門は、北側に向かって開口していることがわかる。そこから南にかけて屋敷地は広がっていたものと考えられ、敷地内には「庭園」「定（能）舞台」「鳥小屋（絵図では「諸鳥飼調所」として記載）」等もあったとされ、多方面の分野に興味を持っていた久茂の生活ぶりをうかがい知ることもできる。

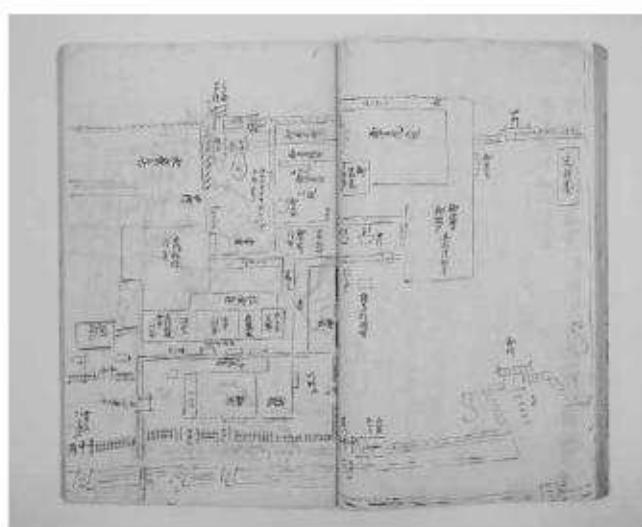
「幕末都城之図」（第5図）には、調査地点の北側に位置する姫木城跡のすぐ西には通称、姫城馬場（姫城通り）が通っている。この通りは近代以降も引き続き使用されており、現在、調査地点の西を通る市道がこの通りに該当する。

（近代以降）

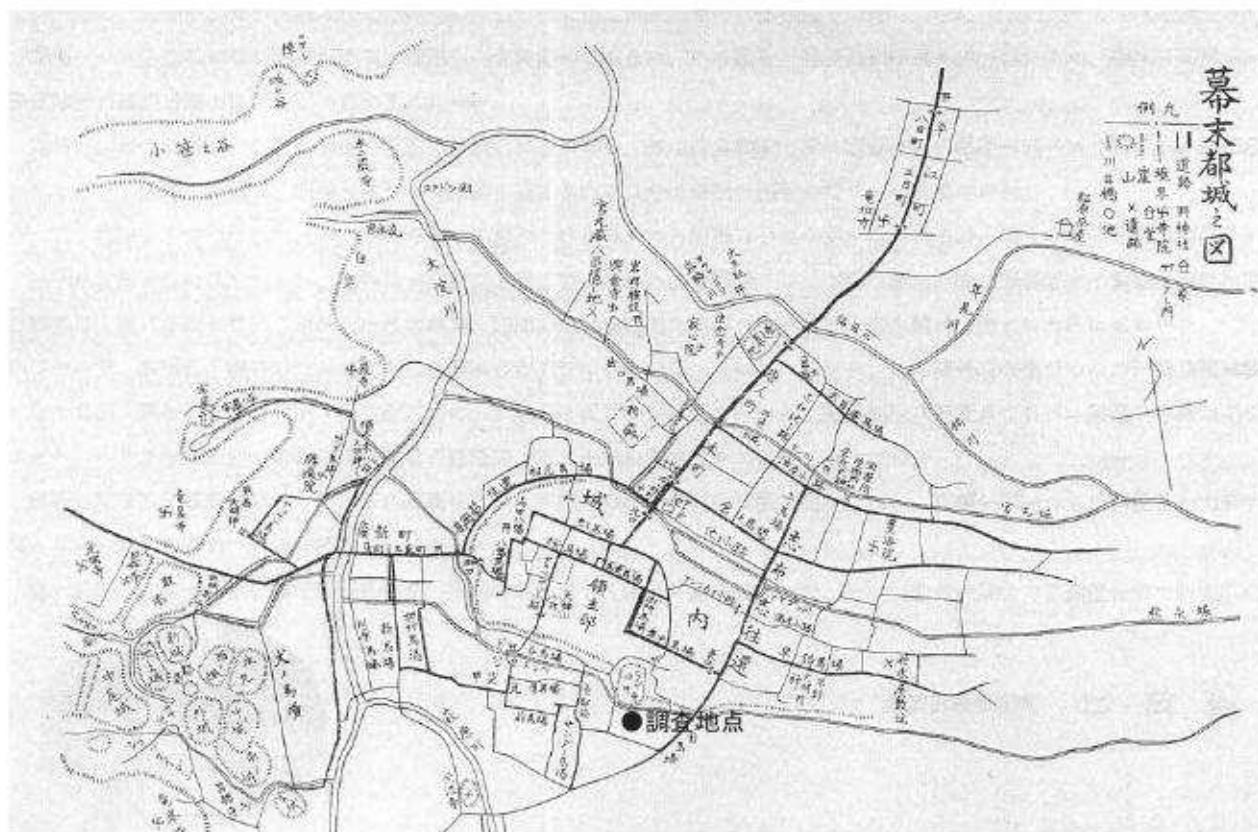
明治2年（1869）、明治新政権の版籍奉還により、当時の都城島津家当主、島津久寛は領地を返上し、鹿児島へ移る。当市では、明治4年（1871）に、廢藩置県により、一時、都城県が設置されるが、明治6年（1873）には宮崎県、明治9年（1876）には鹿児島県に合併される。その後、明治16年（1883）に再び宮崎県が設置され、これに組み込まれる。都城県設置時には、都城領主館跡は都城県庁として使用されている。調査地点の周辺は、公共施設が数多く並ぶ住宅地として、当市の中心地として発展していく。



第3図 島津久茂像 都城島津邸所蔵



第4図 南之館屋敷図（庄内地理誌 卷26） 都城島津邸所蔵



第5図 幕末都城之図と調査地点（前田1989を改変）

また、先に触れた中央東部地区遺跡群では、明治期の遺構、遺物が多数見つかっており、現代に至るまで当市における商工の中心地域として発展してきた状況をうかがうことができる。

【引用参考文献】

- 前田厚 1989「稿本都城市史」

都城市教育委員会 1989「昭和63年度遺跡発掘調査概報」都城市文化財調査報告書(10)

都城市教育委員会 1991「平成2年度遺跡発掘調査概要」都城市文化財調査報告書(13)

都城市教育委員会 1991「大岩田村ノ前遺跡」都城市文化財調査報告書(14)

都城市教育委員会 1994「上ノ岡第2遺跡」都城市文化財調査報告書(27)

都城市教育委員会 1998「都城市の中戸城跡」都城市文化財調査報告書(45)

都城市教育委員会 2004「木ノ前道路」都城市文化財調査報告書(63)

都城市教育委員会 2005「高田遺跡」都城市文化財調査報告書(70)

都城市教育委員会 2006「若吉田遺跡 宮田遺跡」都城市文化財調査報告書(74)

都城市教育委員会 2010「池之上城跡」都城市文化財調査報告書(99)

都城市教育委員会 2004「都城島津家領の唐人町周辺の遺跡」都城市文化財調査報告書(65)

都城市史編さん委員会(編) 2001「都城市史 資料編・近世1」都城市

都城市史編さん委員会(編) 2005「都城市史 通史編 中世・近世」都城市

都城市史編さん委員会(編) 2005「都城市史 資料編・考古」都城市

都城市史編さん委員会(編) 2008「都城市史 通史編 近現代」都城市

宮崎県埋蔵文化財センター 2003「八峰遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書(70)

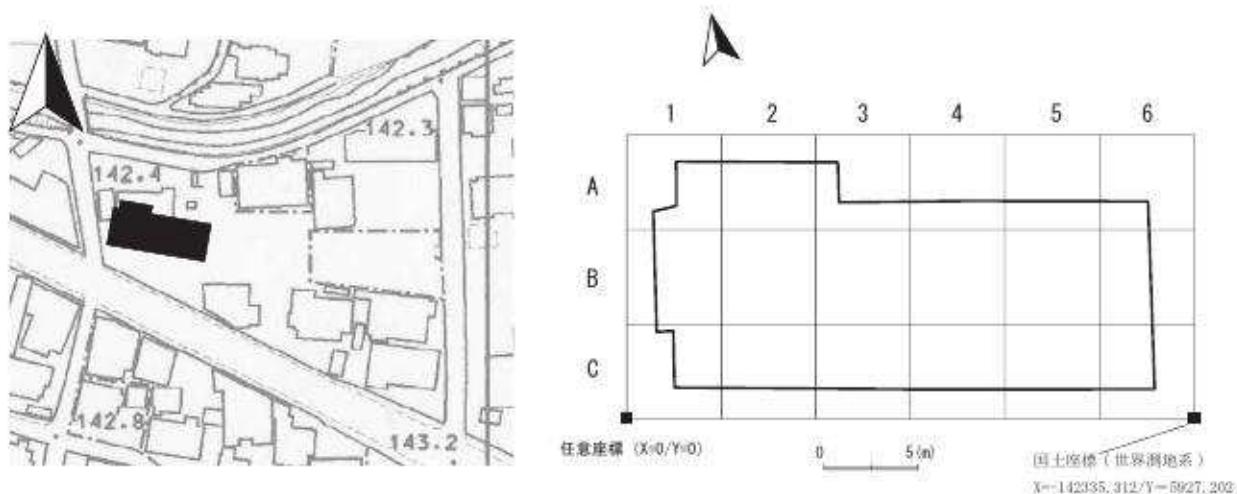
宮崎県埋蔵文化財センター 2003「大岩田上村遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書(77)

第3章 調査の成果

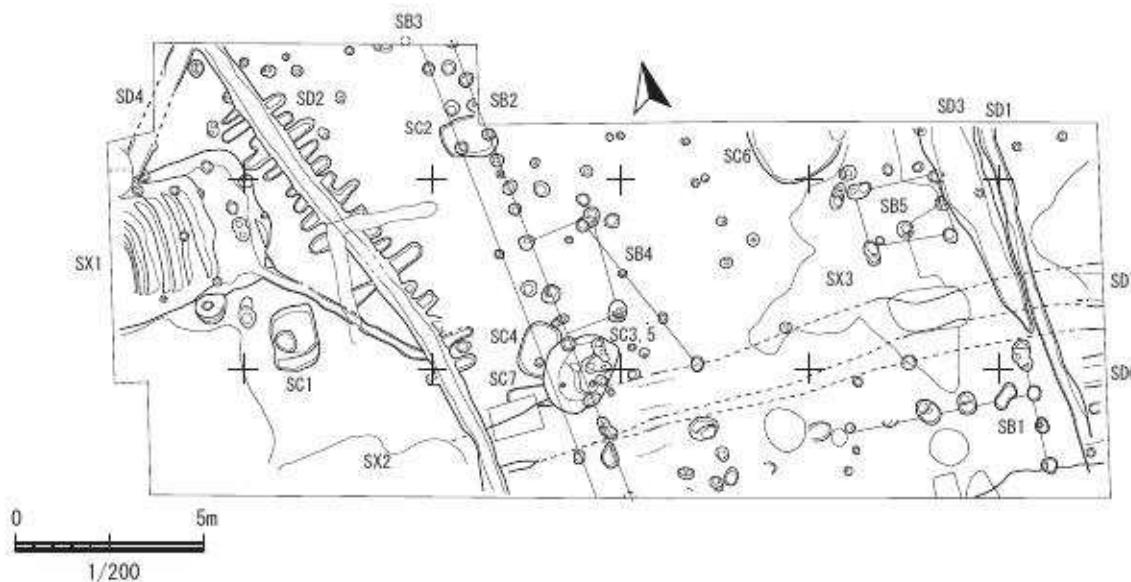
第1節 発掘調査の方法と概要

南御屋鋪跡の発掘調査は、工事建物基礎工により影響のある範囲、「295m²」を対象として実施した（第6図）。調査はまず、重機を使用して表土であるⅠ層を除去し、遺物包含層であるⅡ層を露出させた。その後、発掘調査はグリッド法を用いることとし、5m間隔のグリッド杭を敷設した。グリッドは予定建物の主軸線を基準として設定したもので、各杭には国土地標数値を付した。同時に調査で使用するために任意座標も付した。任意座標は調査区外の南西隅に（X=0、Y=0）の起点を設け、X軸方向にアルファベット、Y軸方向には算用数字を付して、その組合せから（例えば「B 4」のように）グリッド名を呼称した（第6図）。

この後、作業員による遺物包含層掘り下げを行なった。遺物包含層は、手鋤・鋤簍等を使用して掘下げた。これに伴って出土した遺物は、トータルステーションによって取上げ、出土位置の座標を記録した。指頭大以下の小片等は



第6図 トレンチ配置図・グリッド配置図 ($S = 1/2,500 \cdot 1/400$)



第7図 調査区遺構配置図 ($S = 1/200$)

グリッド・層ごとに一括遺物として取上げた。掘下げの終了したグリッドから遺構検出も行ない、検出後には検出状況の写真撮影も行なった。検出遺構には、その都度遺構番号を付し、埋土を観察するための土層を残しながら掘下げた。その後、土層断面図等を作成した後に完掘した。遺構掘下げ中に出土した遺物も座標位置を記録した後に取上げた。完掘した遺構は写真撮影後、スケール1/20を基本とする平面図を作成し、実測図を作成した。

今回の調査で検出された遺構は、近世以前の溝状遺構2条のほか、近世から近現代にかけての遺構として溝状遺構5条、掘立柱建物跡・ピット列5基、階段状遺構1基、土坑6基のほか柱穴と推定されるピットが約100基である(第7図)。

検出された遺構は、スケール1/20を基本とした平断面図を作成し、遺物がまとまって出土したものは、その出土状況についても記録図化した。すべての遺構の図化作業が完了した後、重機を使用して調査区を埋め戻し、調査は終了した(実調査日数:47日)

第2節 南御屋鋪跡の基本土層(第8図)

南御屋鋪跡における調査区の基本的な土層堆積は以下に示す通りである。先述したように、調査地点は姫城川に接した箇所であり、土層の基盤となるのは、河川作用による堆積物である。そのベース上に調査対象となる遺物包含層は堆積している。しかしながら、その堆積状況は一様ではなく、上位からの搅乱等により部分的に欠落している層も見られた。調査区内における層厚は一定とは言えず、地点によってばらつきも見られた。

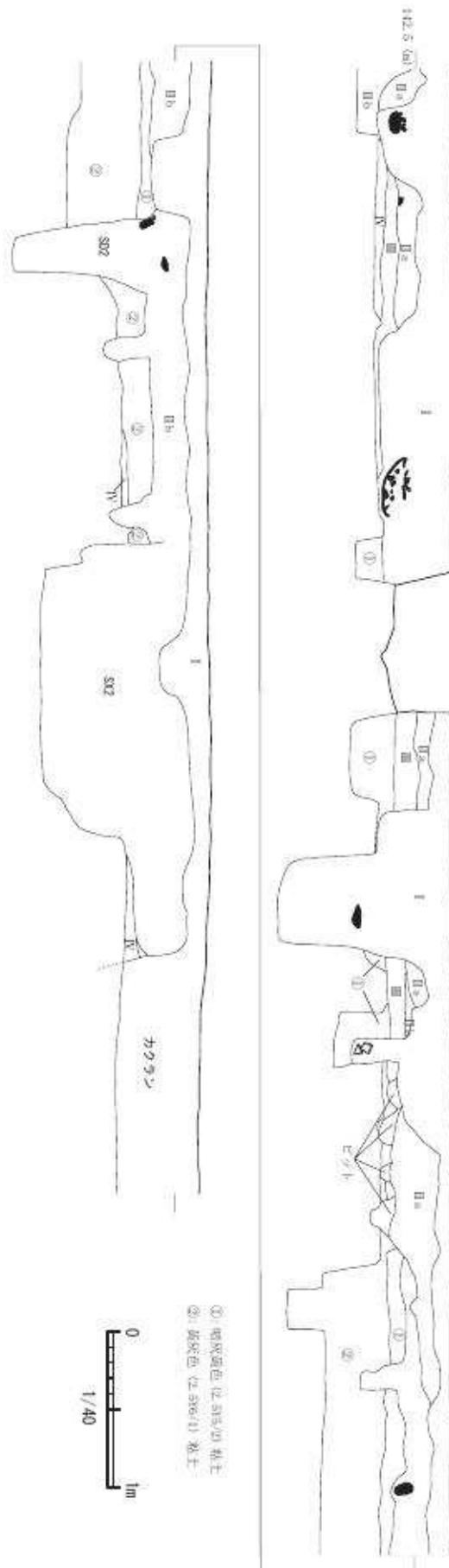
I層: 黒褐色(10YR3/1) 砂質土 黄色軽石、黄橙色粘土ブロック混じる 表土

IIa層: 褐灰色(10YR4/1) 砂質シルト 1cm以下の白色バミス少量含む

IIb層: 褐灰色(10YR4/1) 砂質シルト 1cm以下の白色バミス多く含む

III層: にぶい黄褐色(10YR5/4) 粘質シルト 黄褐色粘土ブロック混じる 近世以前の水田層

IV層: 灰白色(10YR7/1) 砂 白色バミス(白色化した御池軽石) 多量に混じる。部分的に褐灰色砂との互層となり、クロスラミナ状の堆積となる。姫城川に由来する洪水堆積物と考えられる。



第8図 調査区南壁土層断面図(S=1/40)

調査地点とその周辺においては、遺跡の基盤層として、洪水堆積物であるⅣ層が調査地点を含め周辺でも堆積している。基本土層Ⅳ層には川砂や白色化した軽石等も多量に含まれており、調査地点では、地表面より3m下位でも堆積しており、さらに下位へと続いている。

これまでの周辺地域における試掘調査等から得られたデータから推測すると、洪水堆積物の下層には、砂礫層が堆積しているものと考えられる。Ⅳ層の直上に堆積しているⅢ層は、粘質シルトをベースとするものの、部分的に攪拌されたような箇所も見られ、その特徴から水田跡と考えられる。

このⅢ層の上位に今回調査したⅡ層が堆積している。Ⅱ層は、桜島文明軽石（白色軽石）をまんべんなく含む砂質シルトで近世～近現代の遺物を包含している。Ⅱ層は軽石の含有具合によりⅡa層とⅡb層の2層に分離することができた。Ⅱa層、Ⅱb層ともに近世～近現代の遺物を包含しており、その堆積状況は一様ではなかった。

同一層中における遺物の分布密度にも違いは認められなかったことから、Ⅱ層の堆積は近世～近現代に至るまでの時期幅で包括されるものである。

第3節 近世以前の成果

南御屋鋪跡における近世以前の遺構は、溝状遺構が2条（SD6・SD7）検出された（第9図）。両遺構ともに規模が大きく、また調査期間等の制約もあり、遺構をすべて完掘することはできなかった。そのため、トレーナによる一部の掘下げに留まり、遺構の走行、幅員、深さの確認のみで終了した。両遺構ともに比較的の規模は大きかったが、掘下げた箇所からの出土遺物はほとんどなく、SD6から土師器小片が出土しているのみである。

SD6から出土したのは、平安時代の所産の可能性のある土師器坏小片である。非常に細かな小片のため、詳細な時期比定は困難である。

SD6（第9図）

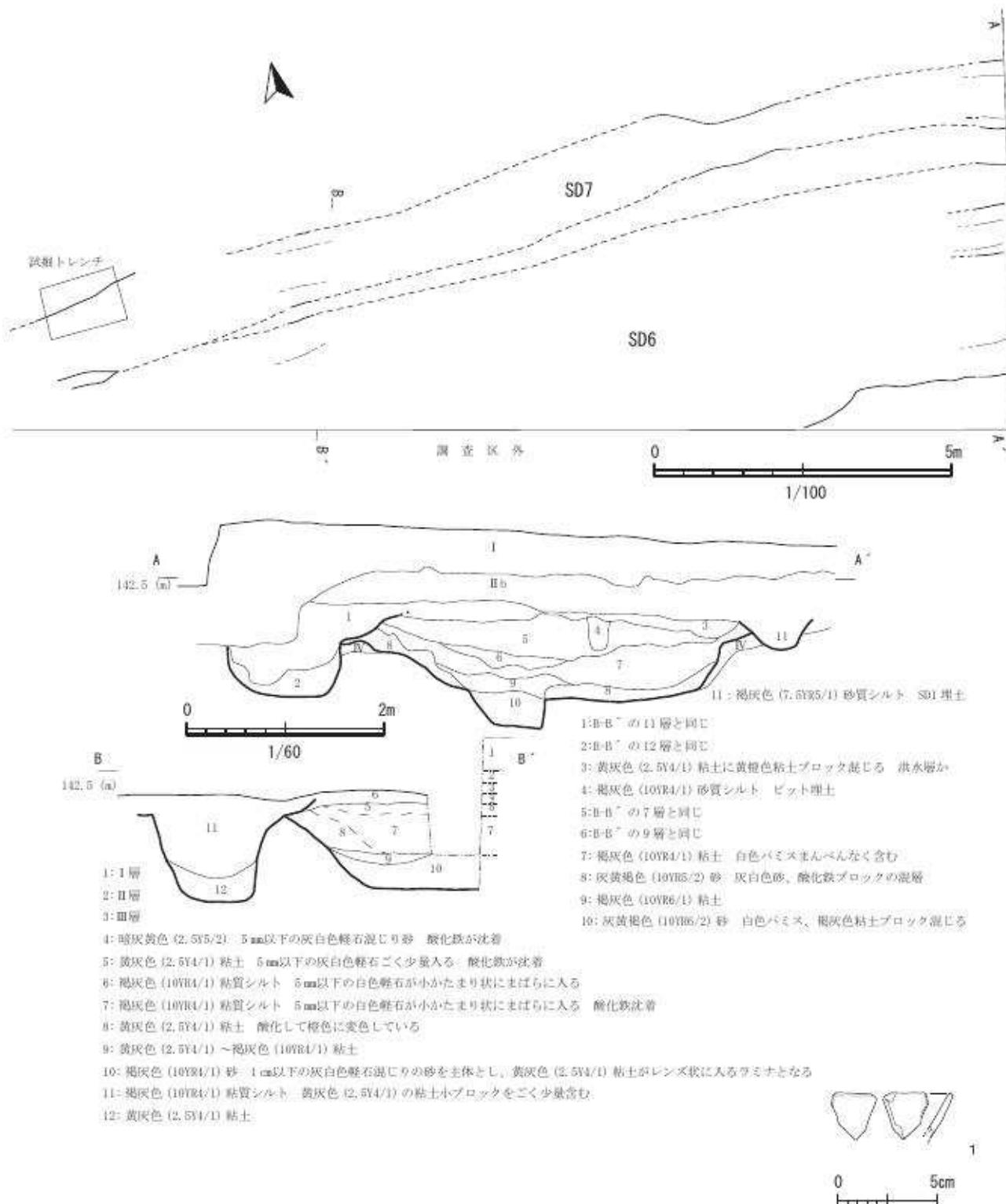
調査区の南半で検出された。東西方向に伸びる溝状遺構である。遺構の幅は約3.5～4.0mあり、約14mの長さで検出された。SD7と切り合い関係にあり、これに切られている。遺構の断面形を見ると、その形状は箱形を呈しており、底面付近は一段深く掘下げられており、2段掘り状の形状を呈している。遺構検出面からの最大の深さは1.0mを測る。遺構埋土は、基本土層Ⅲ層に相当する粘土である。上位には洪水堆積物と考えられる砂層、粘土の攪拌土層も見られることから、遺構埋没後には洪水にも見舞われたことがわかる。調査した範囲において出土遺物はほとんどなく、底面付近から土師器坏の口縁部が1点出土しているのみである。遺構埋土の状況から、何らかの水利に利用されたものと考えられる。

1は土師器で、坏と考えられる口縁部小片である。摩滅の著しい小片であるが、古代（平安時代）に相当する可能性がある。

SD7（第9図）

調査区の南半で検出された、SD6と並走するように東西方向に伸びる溝状遺構である。先述の通り、SD6を切っている。検出された限り、遺構の幅は約1.2mで、長さは約17mにわたって検出された。遺構断面形は箱形を呈しており、床面は平底となる。検出面からの深さは最大で0.9mである。遺構埋土は基本土層Ⅲ層に対応する褐灰色粘質シルトである。最下層には、非常に粘性の高い灰黄褐色粘質土が堆積していた。

SD7から遺物は出土していないが、その年代は遺構の切り合い関係から、SD6構築以後であることは明らかである。



第9図 SD6・SD7 実測図 ($S = 1/100 \cdot 1/60$)

第4節 近世から近現代の成果

近世から近現代にかけての遺構と遺物の概要

南御屋鋪跡における、近世から近現代にかけての時期の遺物包含層はII層である。今回の調査では、II層の掘下げが終了した後、III層もしくはIV層の上面で遺構検出を行なった。その結果、溝状遺構5条、掘立柱建物跡・ピット列5基、階段状遺構1基、土坑7基、不明遺構2基が検出された。

検出された溝状遺構の大半は、南北にほぼ同一方向の主軸を持っている。中でも調査区の西側で検出されたSD2は、遺構深度も深い上に、遺構上位で主軸方向に交差するように浅い溝が連続して検出された。これは上位に何らかの構造物を設置し、暗渠として機能させたものと考えられ、遺構床面のレベルは調査区の北を流れる姫城川に向かって下がっていることから、排水溝として機能していたものと推測される。他の溝状遺構も同様に排水溝として機能していたものが多数あると考えられる。

調査区の西端で検出された、地山削り出しによって作られた階段状遺構（SX1）は、遺構自体が調査区外へと延びていることから、その規模はこれ以上のものと考えられる。部分的な検出のため、遺構全体がどのような構造となるかも不明である。

これらの遺構のほかに多数のピット（小穴）も検出されており、これらのうち、明確な配列を示したものは、掘立柱建物跡やピット列として認定した。明確な配列を捉えられなかったピットの中にも、遺構内からは礫や軽石等の柱根固めに用いられたものが出土しているものもあったことから、これらは建物の柱跡と推測される。この他、土坑も検出されている。不明遺構の深さは浅かったものの、遺物は近現代の陶磁器がまとまって出土していることから、何らかの目的のために構築されたものと考えられる。

このほかに、調査区内からは現代の搅乱土坑も多数検出された。この中には破損した瓦片やガラス瓶等が投棄されたような状態で出土したものがあり、これらに混在して近世～近現代の陶磁器片が出土している。

遺物包含層から出土した遺物は、II層中から近世～近現代陶磁器がまとまって出土している。近世の陶磁器は肥前陶磁、薩摩焼に大別され、いずれも18世紀代以降の製品が主体となっている。肥前陶磁は染付磁器が主体となって出土しており、少量ながら陶器の出土も認められる。この中には刷毛塗技法によって施文された二彩唐津と思われる製品も含まれていた。

薩摩焼はその特徴から、豊野系、龍門司系、元立院系、苗代川系の各製品が見られる。また、これらに加え、江戸時代後期から幕末にかけて鹿児島藩内で流通する、いわゆる「薩摩磁器」として分類される製品も一定量出土している。これらのほか、産地不詳ながら、京焼風色絵陶器や褐釉を施した陶器も出土している。

また、調査区内で複数検出された現代の搅乱土坑からは当該期の遺物に混じって、近世陶磁器も出土しており、これらの中には豊野系の製品と思われる白薩摩や薩摩焼三島手に加えて黒釉、褐釉陶器等の優品として分類できるものも含まれていた。

近代以降の磁器にはコバルト釉や型紙刷り技法による製品が見られ、日常品と思われる磁器皿が多数出土している。これらの中には肥前系のほか鹿児島産、瀬戸産と思われる磁器のほか、戦時中に生産されたものと思われるものも見られる。

これらのほか、13～14世紀代の青磁碗、16世紀代と考えられる樟洲窯系青花も出土している。

第4節－1 掘立柱建物跡・ピット列（SB）（第10図～第12図）

SB1（第10図・第12図）

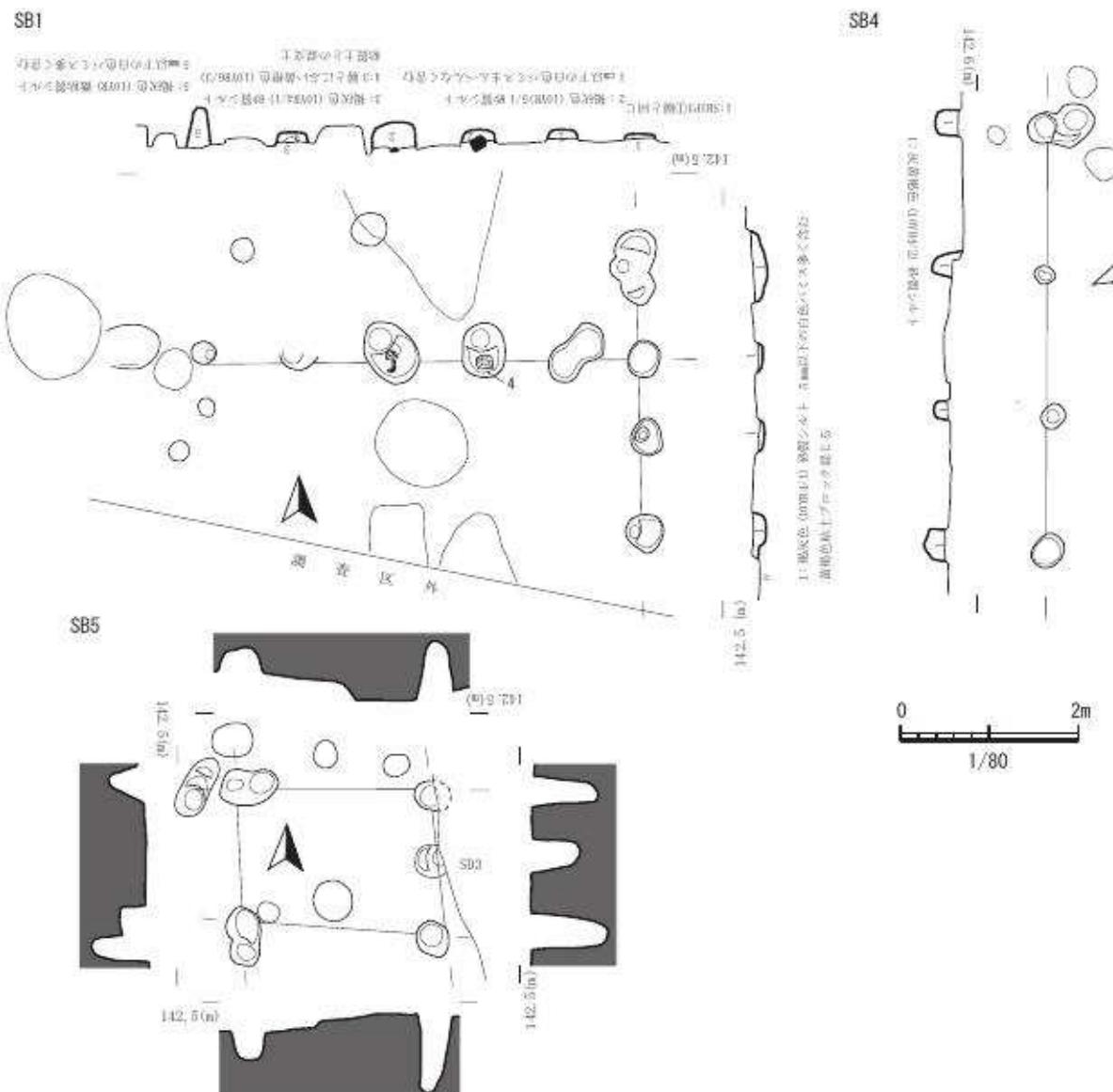
C-5・6グリッドで検出された掘立柱建物跡である。遺構は調査区外へと延びる可能性も高いが、検出された限り、南北に3間、東西に5間（+a）のプランを持っている。柱列に対応する桁、梁は検出されなかつたため、明確な建物跡となるかは不明であるが、ここでは掘立柱建物跡として報告する。検出された柱穴の一部では少なくとも2基のピットが切り合って検出されたことから、同じ位置で建替を行なっている可能性がある。柱穴の径は0.4～0.5m程度で深さは最大で0.3mで0.1～0.2m程度の浅いものが多い。

遺物も遺構内から出土している。陶磁器では薩摩焼が少量出土しており、豊野系白薩摩の碗が出土している。このほかに供養塔と思われる石塔も出土している。近世に構築された遺構である可能性が高い。

2は豊野系白薩摩碗の底部である。白色の素地で透明釉がかけられている。3は鉄釘である。錆彫れが著しい。

4は宝篋印塔あるいは宝塔的五輪等の一部と考えられる石製品である。上端部には2ヶ所の抉りが入っており、表面には台形様の線刻が認められる。その上には蓮華を簡略化した線刻がある。表面が風化し、一部が剥落しているものの、部分的に墨書きも認められるが文字かは判別できない。元々の製品を切断しているようであり、上端の抉りは切断の為に鑿を打ち込んだ痕跡と思われる。何らかの用途で転用された可能性がある。

石材は凝灰岩が使用されているが、目が粗く軟質である。これは『庄内地理誌（巻61）』に「安久石」として記述



第10図 SB1・SB4・SB5実測図 ($S = 1/80$)

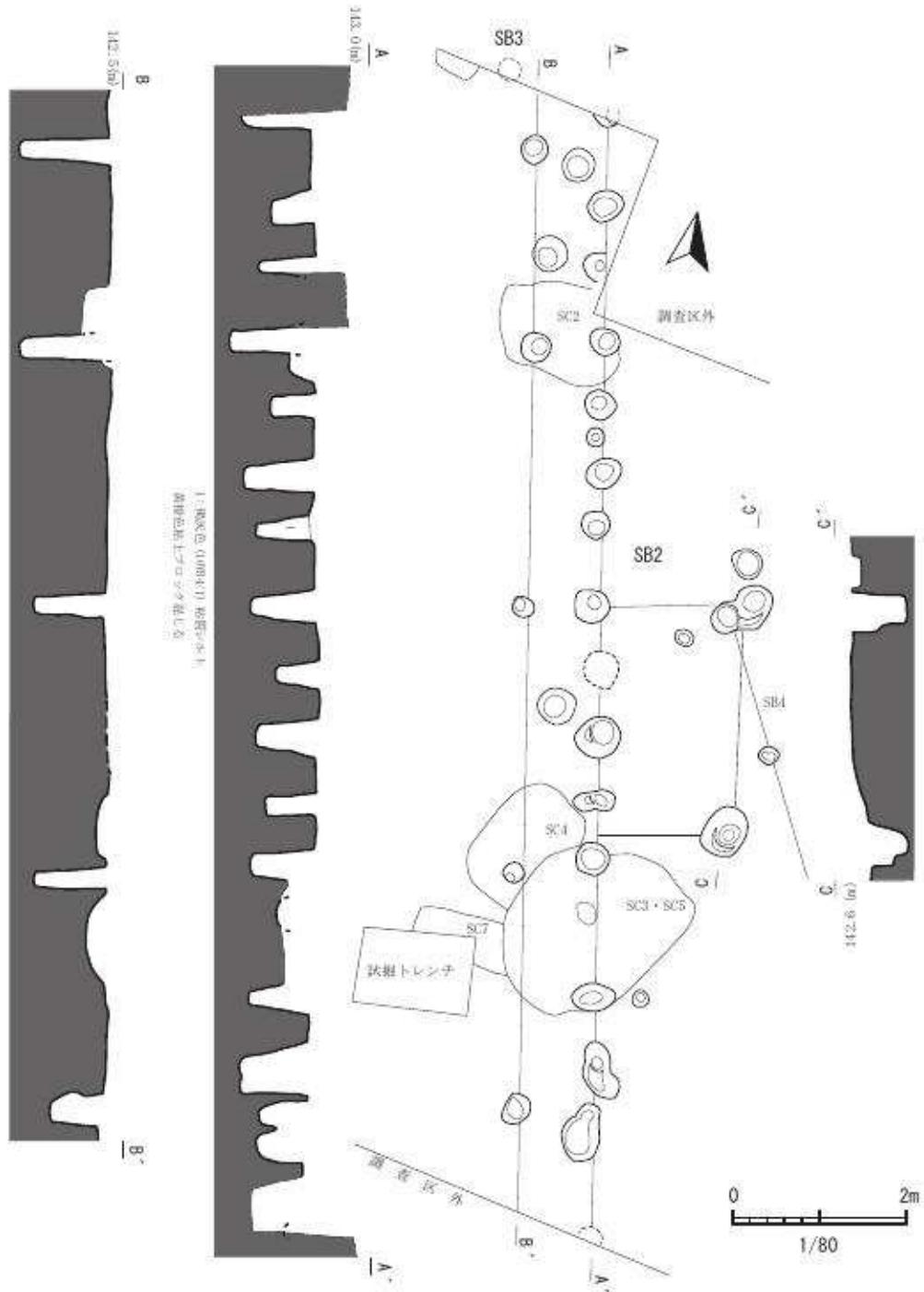
されている、市内南部で産出するものに該当する。

※都城市史編さん委員会（編）2003「都城市史 史料編 近世3」都城市

SB2 (第11図・第12図)

A～C-3グリッドで検出された柵列あるいは塀跡と考えられるピット列である。調査区を南北に横断するように検出されており、さらに調査区外へと延びているようである。後述するように、並行して延びるSB3と対応関係にあると思われるほか、中央部では東側へ張り出したような柱穴も検出されており、これは門状施設である可能性がある。SB2と土坑SC2は切り合い関係にあり、SB2がSC2を切っていることから、これよりも新しいことがわかる。東側に張り出すように検出された2基の柱穴は門状遺構の可能性が高い。検出面からの深さは0.7mである。

検出された柱穴は合計18基で0.2~0.6mの間隔で並んでいる。遺構の深さは検出面から0.4~0.9mの間で推移している。深度の浅いものと深いものが交互に並んでいる状況も認められるほか、掘り方が重複している柱穴もあることから、建替がなされた可能性がある。



第11図 SB2・SB3実測図 ($S=1/80$)

SB2からは肥前系磁器のほか、薩摩焼が出土している。薩摩焼の製品には龍門司系と思われる碗、苗代川系鉢が出土している。

5は薩摩焼龍門司系碗の口縁部である。7～10は門状遺構部分から出土している。7は肥前系碗の底部で外面には染付文様が確認できる。18世紀後半～19世紀代の年代幅に位置付けられる。8は龍門司系の碗である。9は豊野系白薩摩碗と思われる口縁部である。直線的に立ち上がる器形を呈する。白色素地に透明釉が掛けられており、光沢を持つ。10は苗代川系の陶器擂鉢である。口縁部断面は屈曲したL字状を呈し、外面には突帯が付く。内面には擂目が認められる。

SB3（第11図・第12図）

A～C - 3グリッドで検出されたピット列である。調査区を横断するように検出されており、その延長線は調査区外へと伸びているものと考えられる。このピット列はSB2と並行して検出されており、なおかつ一部のピットはSB2のものと対応した位置にあることから、これと同一の構築物である可能性が高い。ピット間の間隔は2.3～3.0mである。ピットの深さは検出面から最大で1.1mであり、先のSB2よりも深いものが多い。機能は不明ながら、SB2を壟跡と仮定した場合、そこから伸びる屋根を補助的に支えるための支柱等の機能が考えられる。

SB3からは薩摩焼龍門司系碗が1点出土したのみである。6は碗底部である。褐色の釉が掛けられ、内面見込みには蛇ノ目釉剥ぎが確認できる。

SB4（第10図）

B - 3・4グリッドで検出された柵列と考えられるピット列である。北西 - 南東方向に伸びる3間のプランとなる。この柱列に対応する他の柱列は認められなかった。SB2の門状遺構の柱穴と切り合い関係にあり、これを切っていることから、これより新しい時期のものと判断される。ピットの深さは、最大で0.3mである。

SB4からは遺物は出土していない。

SB5（第10図）

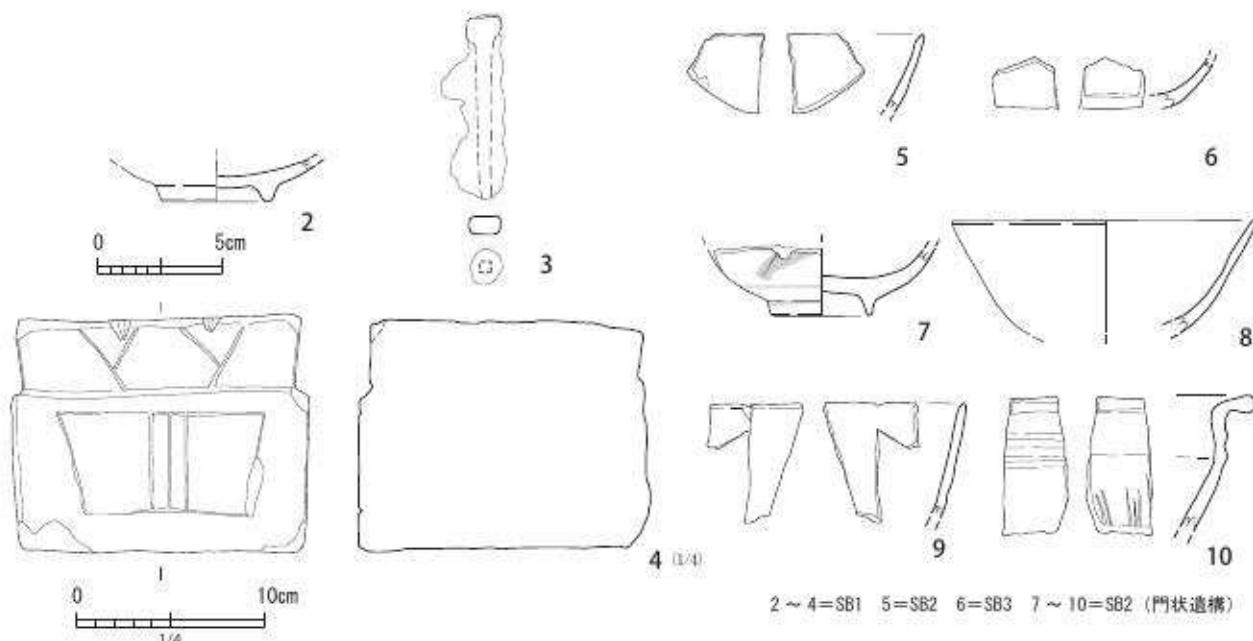
B - 5グリッドで検出された1間×1間の掘立柱建物跡である。主軸は調査区で検出された溝状遺構と同様に北西 - 南東方向に伸びている。複数の柱穴が集まっていることから、かつ切り合いも認められることから、建替がなされた可能性もある。北東端の柱穴は溝状遺構SD3に切られており、これよりも古いことが分かる。柱穴の深さは検出面から最大で0.9mである。

SB5からは遺物は出土していない。

第4節－2 階段状遺構（SX）

SX1（第13図～第15図）

調査区の西壁付近、B - 1グリッドで検出された。地山であるIV層を削り出して作られた階段状遺構である。主軸は東西方向にあり、東から西へ階段を降りる構造となる。4.5×3.9mの範囲で掘り込みが検出されている。遺構の深さは検出面から最大で1.8mを測る。北側の西壁付近はカクランによって切られている。遺構はSD4を切っていることから、これより新しいものと思われる。南東隅ではSD5と接続しているが、遺構埋土の特徴に大差はなく、遺構の切



第12図 挖立柱建物跡・ピット列出土遺物（S=1/3・1/4）

り合い関係は不明である。また、遺構の西側は調査区外へと延びていることから、全形は不明である。遺構内には複数の小ピットが検出されており、これらがやや規則的な配置を持つことから柱穴の可能性がある。

遺構の東端には、約1.0×3.0mの範囲に平坦面が作られており、そこから西側にかけて下りる構造となっている。確認された段数は7段である。最下段付近からは湧水も見られた。ピットが検出されたことから、上位には屋根等の構造物が存在していた可能性がある。南東隅のピットでは、掘り方の上位に礎石と考えられる軽石集積が検出されている。このため、この柱穴は掘り方と礎石の少なくとも2回の使用があったと認められる。さらにその西には、やや大型の土坑状ピットが検出され、その下層からは瓦片がややまとまって出土している。これらは柱の根固めとして使用されたものと推測される。土坑状となったのは柱抜き取りによる結果と思われる。

遺構埋土は、II層をベースとした褐灰色砂質土であり、下層ではこの層と地山であるIV層とが混濁したような土層も見られた。下層ほど水分を多く含み、粘性が強い。

SX1からは、上層から下層にかけて遺物が多量に出土しており、上層ではガラス片や近現代の瓦等に加え炭化物が投棄されたような状態で出土している。上位からは完形に近い薩摩焼鉢も出土している。遺構の中層から下層にかけては、近世～近現代の陶磁器類がややまとまって出土したほか、これらに混在して16世紀代の青花磁器片も出土している。このほか、刀装具である真鍮製の鍔が出土している。

これらのことから、SX1は少なくとも近世期に構築され、遺構の廃絶後、埋没して近代以降、凹地状になったところに当該期の遺物が投棄されたものと考えられる。

11、12は中国明代の漳洲窯系青花磁器である。11は皿で内面見込みに樓閣人物が描かれる。16世紀代に位置付けられる資料である。12は碗で裏銘が部分的に確認できる。13は下層から出土した磁器碗である。外面に葡萄唐草文が施文される。14は肥前系の蕪麦猪口で外面に筆文が認められる。18世紀後半～19世紀代の資料と思われる。15は肥前系碗底部で内面見込みに五弁花文が見られる。「大明年製」の裏銘を持つが、「製」の字は崩れている。16は肥前系皿で口縁部は折れ縁である。内面には葡萄唐草文が描かれている。18世紀後半の可能性がある。

17は肥前系皿で内面には波状の線文が描かれる。内面見込みにはコンニャク印判による五弁花も認められる。時期は18世紀代と考えられる。18は肥前系猪口で外面に筆文が描かれる。18世紀後半以降と考えられる。19は猪口底部である。外面にわずかに呉須が残る。20は肥前系の瓶（徳利）頸部である。内面上半には釉が残っている。18世紀代の資料と考えられる。21は肥前系の上手蓋で外面に花文が描かれている。22は小壺で口縁端が外反する。外面には草花文が描かれる。肥前系であろうか。23～25は近代の磁器と考えられる。いずれも上層からの出土である。24は筒形を呈する。25は筆洗いである。内面中央にやや傾斜する仕切りが付いている。近代以降の所産と考えられる。

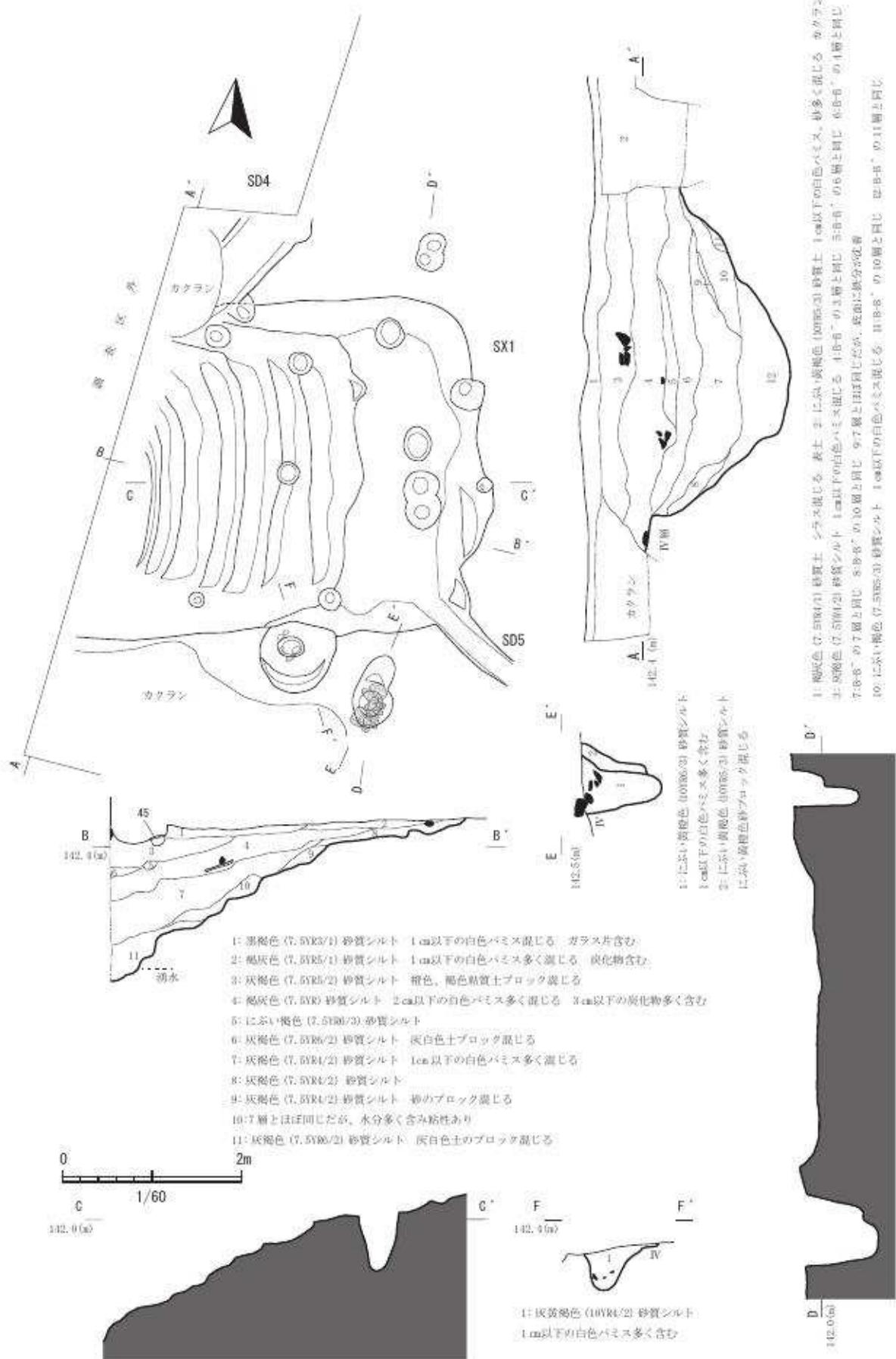
26は関西系の陶器で直線的に立ち上がる器形を呈する。27は筒形碗である。京・信楽系の小杉碗の可能性がある。釉には貫入が認められる。29は薩摩焼元立院系の褐釉碗と思われる製品で内面は露胎である。30は肥前系陶器と思われる碗で、内面見込みには蛇ノ目釉剥ぎが認められる。31～39は薩摩焼龍門司系の製品である。31は白土が掛けられ、その上に透明釉が掛けられる。34は褐色釉が掛けられ、内面には蛇ノ目釉剥ぎが認められる。35は産地不明の碗である。外面には灰白色釉が掛けられ、内面には目跡が残る。抹茶碗写しの可能性がある。37は蛇ノ目釉剥ぎが施される。高台疊付には施釉前、製品の切り離し時に付けられたと思われる欠損部が認められる。40、41は苗代川系の土瓶である。

42～45は苗代川系の鉢である。42は18世紀後半と考えられる。43は片口鉢である。45は捏鉢である。46は苗代川系の大壷である。47～49は近代の植木鉢である。47は口縁内面まで釉掛けされ、それより以下は露胎である。土師質の焼成である。48、49は同一個体と考えられ、49の底部には脚が付けられる。50、51は甕の底部である。51の内面見込みには砂目が明瞭に残っている。近代の製品と考えられる。

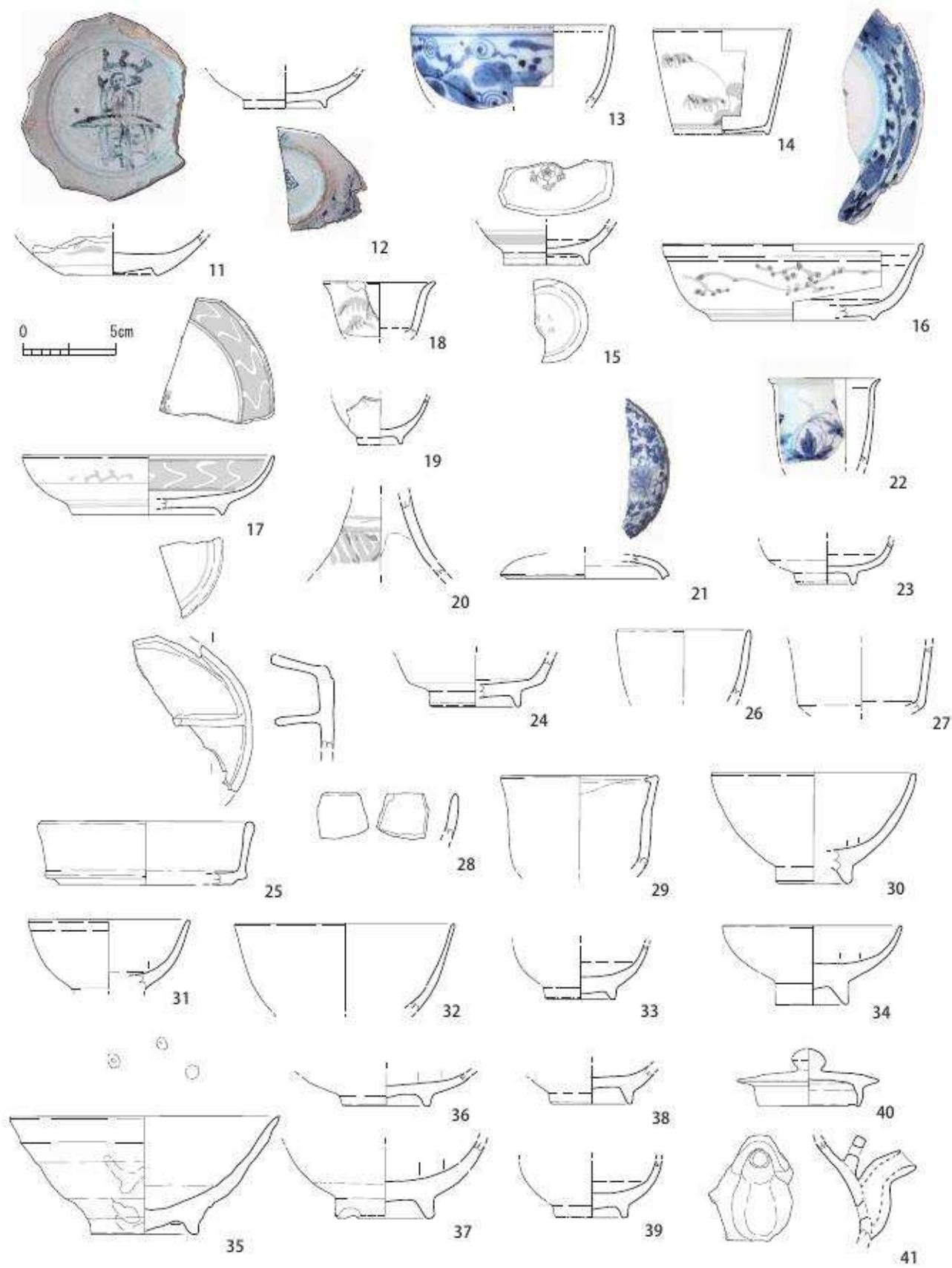
51はキセル煙管である。52は火打石と思われる。一側縁に微細剥離が認められる。石材はメノウと思われる。遺構の上層から出土している。53は焰焰の把手である。

55は鍔である。梢円形の形状を呈し、中心には梢円形の円孔が穿たれている。材質は真鍮である。中心孔の大きさからは脇差などの刀身が想定される。

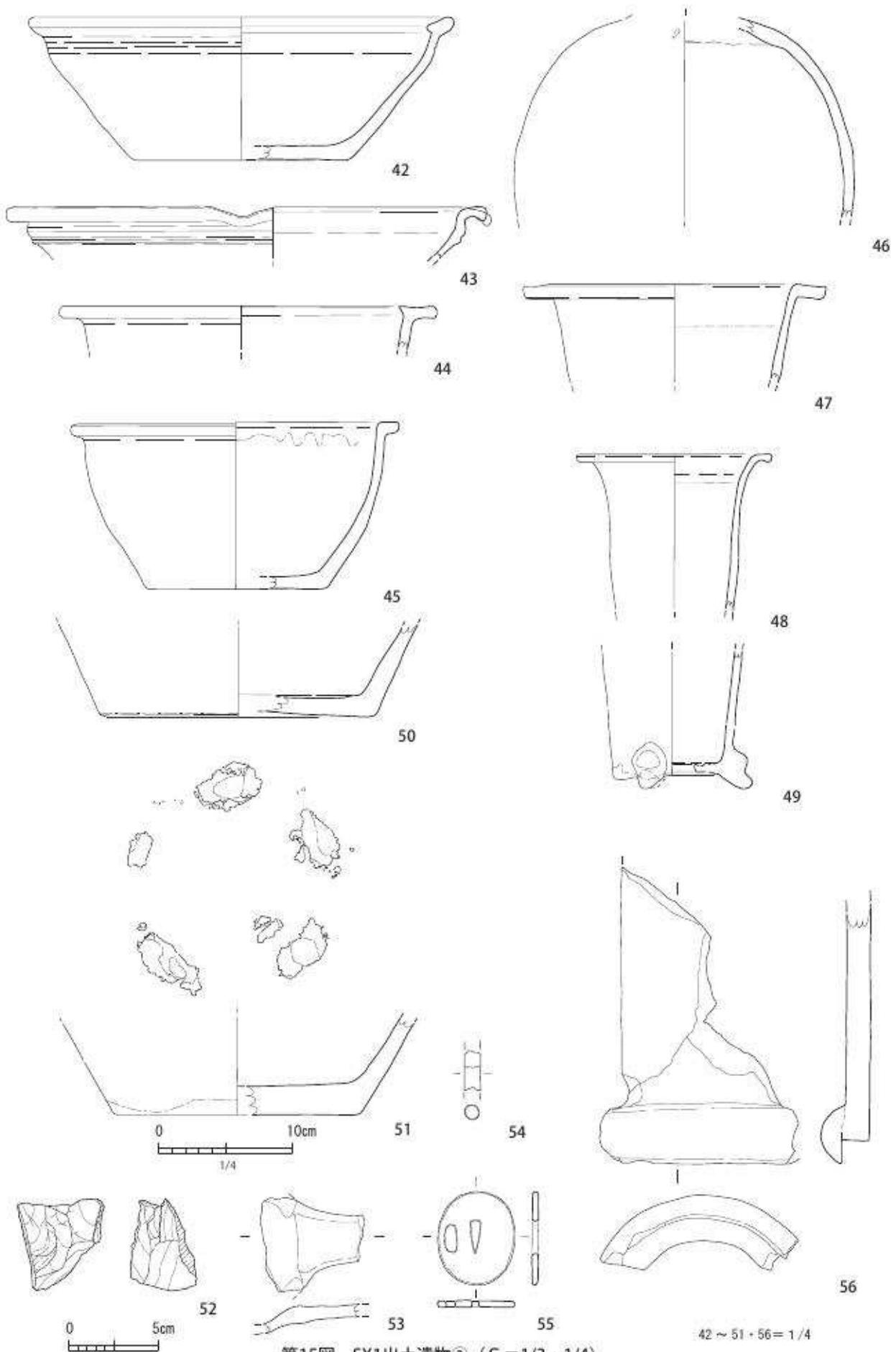
56はSX1に隣接するピットから出土した、柱根固めに使用されたと思われる瓦である。雁振瓦と考えられる。時期は不明である。



第13図 SX1実測図 (S = 1/60)



第14図 SX1出土遺物 (S=1/3)



第15図 SX1出土遺物② ($S = 1/3 \cdot 1/4$)

$$42 \sim 51 + 56 = 1/4$$

第4節－3 溝状遺構（SD）（第16図～第19図）

今回の調査で検出された近世以降の溝状遺構は5条である。調査区の全域から検出されており、5条とも概ねの主軸は南北方向にある。調査区北を流れる姫城川へと向かっていることから、これに注ぎ込む排水溝等の機能が推定される。遺構埋土はすべてⅡ層に対応しているほか、掘削の深いものは下層のⅢ層と混濁したようなもの認められた。各溝状遺構からは遺物もやまとまって出土している。概ね近世期のものが多いが、埋土上位からは近代の遺物が出土しているものもある。出土遺物は陶磁器がその主体を占め、土製品が出土したものも認められた。

SD1（第16図・第18図）

調査区の東端、B・C-6グリッドで検出された。北西-南東方向に延びる溝状遺構である。隣接するSD3と並行しており、ほぼ同時期の遺構と考えられる。床面のレベルは北側に向かって下がっていることから、姫城川へと注ぎ込む排水溝としての機能を持つものと考えられる。調査区北壁の断面ではSD1が隣接するSD3に切られていることから、これよりも古いことが分かる。検出された幅は0.4mである。遺構断面形は箱形を呈し、検出面からの深さは最大で0.5mである。遺構埋土はⅡ層をベースとした灰色砂質土である。

SD1の遺物出土状況について見ると、上層からは染色体文を施された瀬戸産小碗が出土していることから、遺構の埋没時期は幕末期以降と考えられる。中～下層からは近世陶磁が少量出土しているものの、下層からは型紙刷りの施された磁器香炉も出土していることから、遺構の時期は近代と考えられる。

57は肥前系磁器碗の口縁部である。58は瀬戸の染色体文碗である。59は薩摩焼苗代川系捏鉢の口縁部である。60は産地不明の陶器鉢の口縁部である。近代以降の所産と考えられる。61は産地不明の磁器香炉である。外面には型紙刷りによる雀文が描かれている。産地は不明である。

SD2（第17図・第18図）

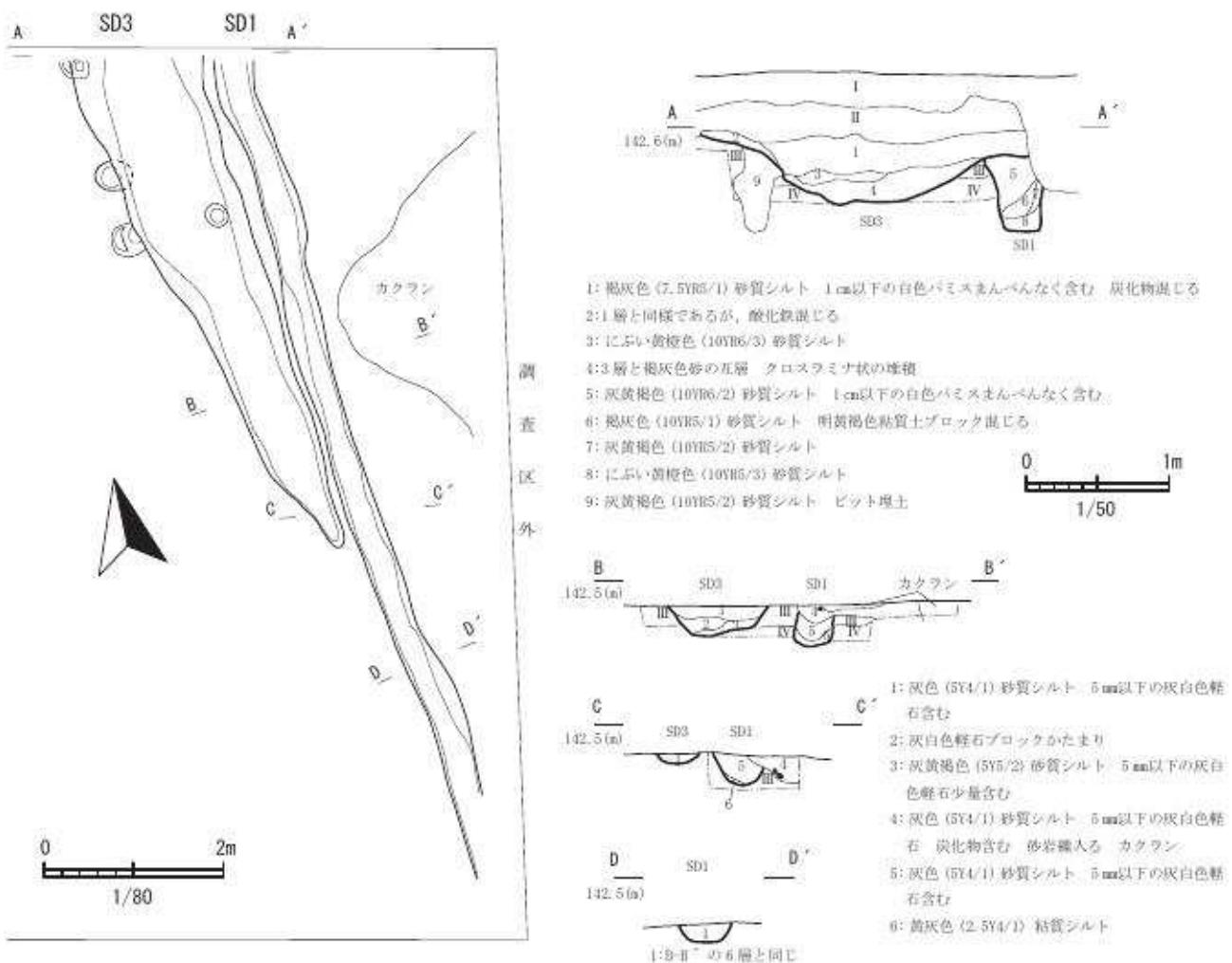
調査区の西側、A-C-1～3グリッドにまたがって検出された。北西-南東方向に主軸を持ち、遺構は調査区外へも延びている。検出された長さは14.4mである。調査区の北壁付近では後述するSD4と接続しているが、土層断面の観察からは両者に切り合は認められず、新旧関係はないものと考えられる。基本的な幅は約0.6mで、これに直交するように幅約0.3mの浅い土坑状の溝が連続して掘り込まれている。これは遺構上位に何らかの構造物を設置した痕跡と思われ、SD2は暗渠として使用されたものと考えられる。遺構底面のレベルは北側に向かって下がっていることから、姫城川へと注ぎ込む排水溝としての機能が想定される。

遺構断面形は箱形を呈し、直線的に立ち上がる形状となる。検出面からの深さは最大で1.5mを測る。遺構埋土はⅡ層をベースとする灰黄褐色砂質土であるが、下位ではⅣ層に由来する砂層がベースとなっており、これらが明瞭ではないものの、ラミナを形成している。最下層には砂層が堆積していた。

SD2の上層からはやまとまって遺物が出土している。これらの内で時期が特定できるものには、上層埋土から出土した、高台外面に「○×文」を連続して巡らす肥前系磁器皿の底部（65）があり、18世紀中葉～末にかけての時期（大橋編年IV期）と考えられる。よって、SD2はこの時期に下限が認められる。

62は肥前系磁器紅皿である。内面は型押整形によって菊花文様が陽刻される。内面のみ釉掛けされ、外面の大半は露胎である。18世紀代の資料と考えられる。63、64は肥前系猪口である。63は下層からの出土である。64は上層から出土した。内外面とも染付等の文様はない。65は肥前系皿である。内面には葡萄唐草文が描かれている。66は関西系の京焼色絵陶器碗である。赤上絵で筆文が描かれるが、一部上絵が剥落している箇所が見られる。67は肥前系京焼風陶器で内面見込みに呉須状の薄い色絵が残っている。68は堅野系白薩摩鉢である。胎土は灰白色で黒色の微細な粒を含んでおり、この上に透明釉が掛けられる。餌鉢の可能性がある。69は白薩摩鉢である。70は元立院系黒釉碗の口縁部である。下層から出土した。71は関西系陶器碗である。72は産地不明の黒飴釉を施した楽茶碗である。器面全面に施釉される。素地の焼成は土師質であり、非常に軟質である。73は薩摩焼龍門司系碗の底部である。74は産地不明の褐釉の施された茶入もしくは鉢である。内面は露胎である。下層から出土したものである。

75～77は薩摩焼苗代川系の土瓶である。75は蓋である。77は完形に復元できるものである。底面にはススが残っている。18世紀後半以降の製品と思われる。78は台状の土製品底部である。79は鍋置きと思われる土製品である。器を支えるための支脚が3本付いている。内面はロクロナデによる棱線が目立っている。80は苗代川系插鉢の底部である。18世紀代の製品と考えられる。



第16図 SD1・SD3実測図 (S=1/80・1/50)

81は板状土製品である。欠損しており、用途は不明であるが、工具によって付けられた扇状の文様が認められる。切断面が認められることから、何らかの土製品を転用した可能性がある。

SD3 (第16図・第19図)

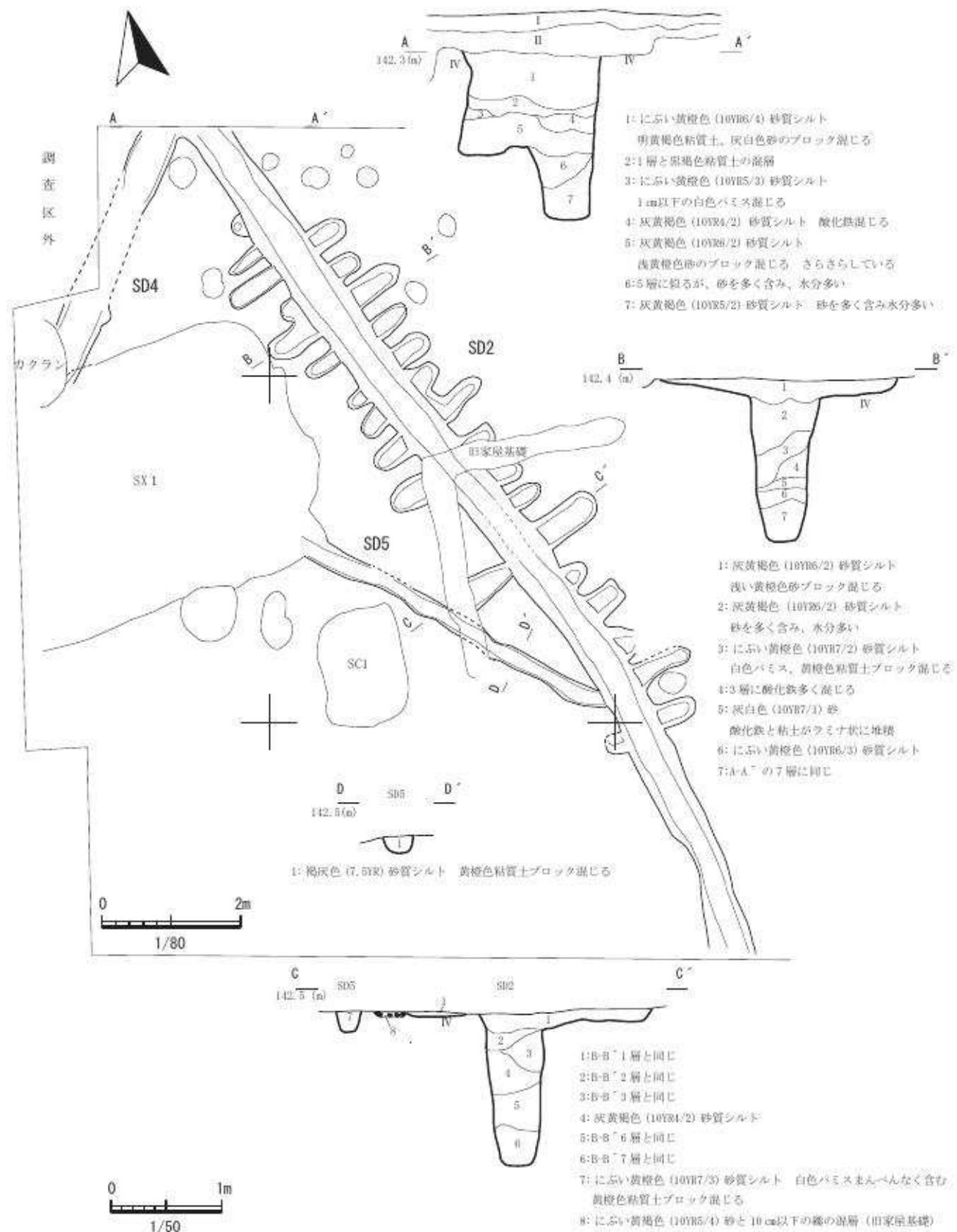
調査区の東側、A・B - 5グリッドで検出された。主軸は南北方向にあり、先述したSD1と併走するように検出された。遺構の主軸方向は南北にあり、遺構の掘り方は調査区中央付近で収束している。検出された溝幅は最大で1.4mある。遺構断面形は緩やかに立ち上がる箱堀状の形状を呈しており、深さは最大で0.4mを測る。遺構埋土は灰色砂質土を基本としたもので、下層では砂層と交互に堆積したラミナ状の堆積を呈していることから、何らかの水成作用があったものと考えられる。遺構の底面は北側に向かって下っており、姫城川へと延びていることから、排水溝としての機能が想定される。

SD3からは、上層より京焼が出土しているが、遺構の下層からは近代以降と思われる磁器小片が出土していることから、この時期に掘り込まれた可能性が高い。

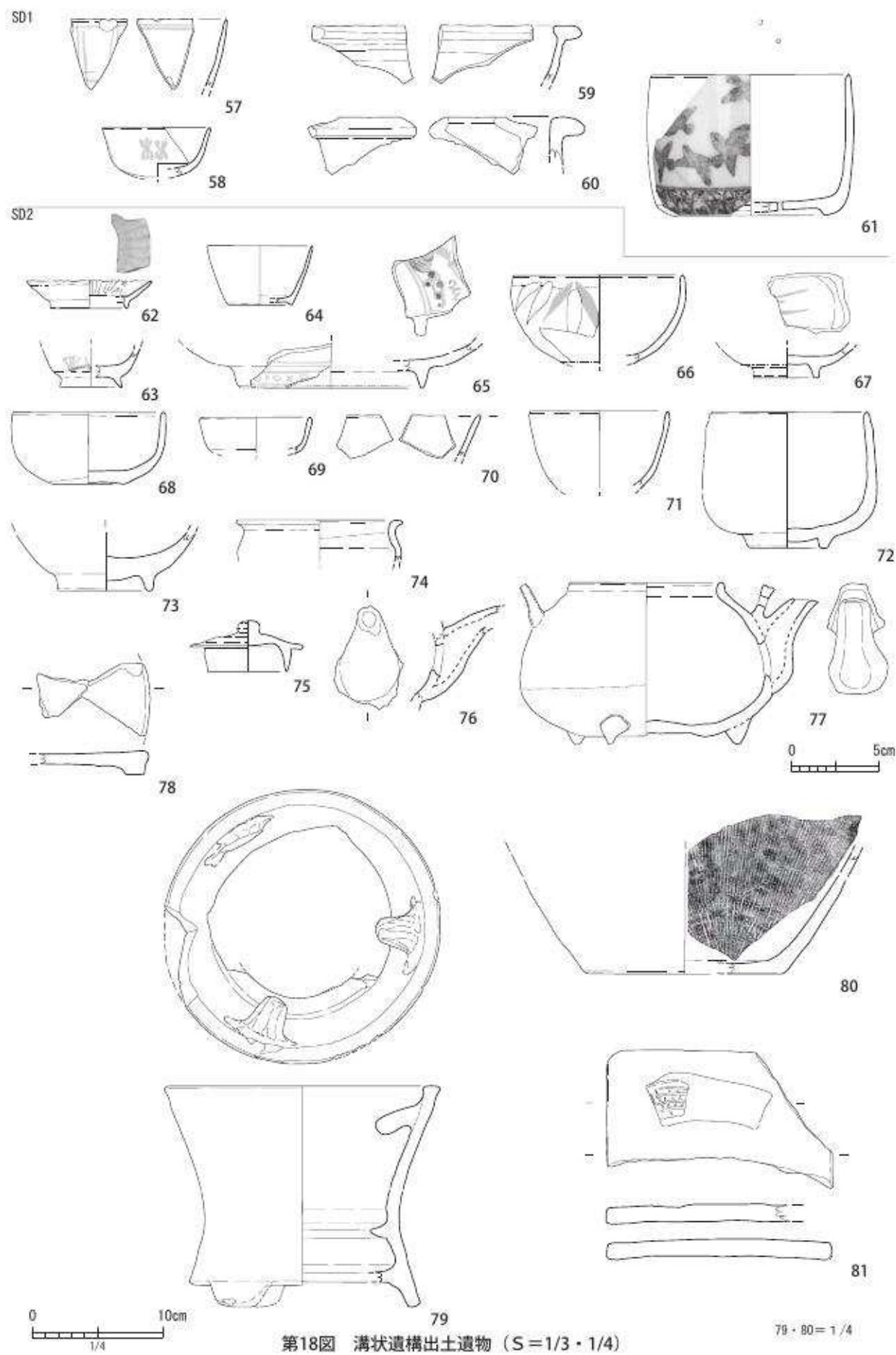
82は肥前系磁器の紅皿である。内面には目跡が残っている。83は薩摩焼龍門司系の碗底部である。84は京焼の平碗と思われる。内面見込みに赤色、緑色の絵具によって描かれた色絵が認められる。

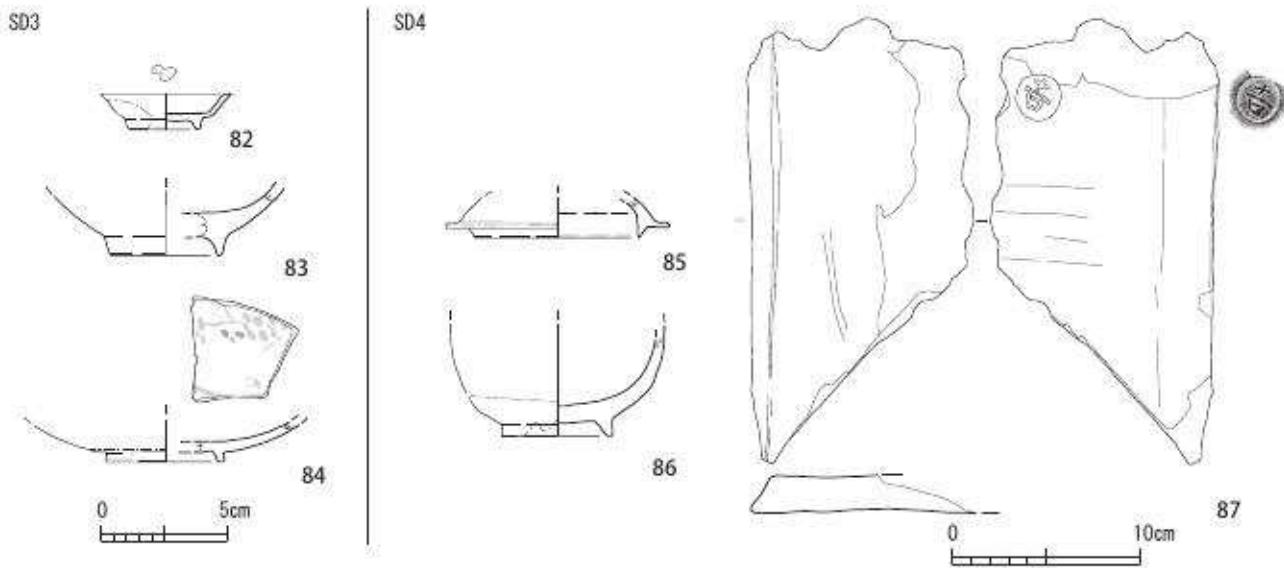
SD4 (第17図・第19図)

調査区の北西隅、A - 1グリッドで検出された。主軸は北東 - 南西方向にある。SD4は調査区北壁付近でSD2と接続している。北壁の土層断面を確認したところ、両者に切り合い関係は見られなかったことから、同時期の遺構と考



第17図 SD2・SD4・SD5実測図 ($S=1/80 \cdot 1/50$)





第19図 溝状遺構出土遺物② ($S=1/3 \cdot 1/4$)

えられる。西壁付近ではカクランによって大きく切られており、SX1によても切られていることから、これよりも古い。遺構の検出幅は0.6mであり、遺構断面形は箱形を呈し、直線的に立ち上がる。深さは検出面から最大で0.9mを測る。遺構埋土はⅡ層に対応する灰黄褐色砂質土である。

SD4からは薩摩焼龍門司系統が出土しているほか、底面付近からは平瓦の小片が出土している。遺構内から遺物は少量出土したのみであるが、他の遺構との切り合い関係から近世期に掘削された溝状遺構であることがわかる。床面のレベルは調査区北側の姫城川に向かって下っている。このことからもSD4は排水溝としての機能を持つものと考えられる。

85は陶器蓋である。灰色胎土に白土が掛けられ、その上から透明釉が掛けられている。薩摩焼龍門司系の製品と考えられる。86は龍門司系統碗底部である。85と同様に白土が掛けられ、その上に透明釉が掛けられる。87は下層から出土した平瓦である。背面に「吉」文字のスタンプが認められる。この類例は鹿児島城（本丸）跡出土品（鹿児島県教委1983）^{*}の中にも認められる。

^{*}鹿児島県教育委員会1983『鹿児島（鶴丸）城本丸跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（26）

SD5（第17図）

調査区の西、B-2グリッドで検出された。主軸は東西方向にあり、遺構は直線的に延び、SX1とSD2を接続している。幅は0.3mである。遺構断面形は浅いU字形を呈する。検出面からの深さは浅く、0.2mほどしかない。部分的に上位からの搅乱を受けている箇所もある。

SD5からは、不明鉄製品と煉瓦の小片が出土している。これらのほか、近現代と思われる瓦小片も出土している。このことからも遺構の時期は近代以降と考えられ、SD5と接続しているSX1、SD2よりも後に掘り込まれたものと考えられる。

第4節-4 土坑（SC）（第20図・第21図）

SC1（第20図・第21図）

B-2グリッドで検出された。主軸は南北方向にある。平面形は長方形のプランを呈し、規模は1.7×1.2mを測る。遺構の断面形は箱形で直線的に立ち上がる。遺構の南端は堀り残されており、段落ち状のステップとなる。底面付近からは瓦が投棄されたような状態でまとまって出土しており、これに混じってガラス片、植木鉢の小片、ビニル線等が出土した。出土瓦は棟瓦が大半で軒瓦も少量ながら認められた。遺構の時期は比較的新しく、現代の廃棄土坑と考えられる。

出土した遺物のうち、磁器碗のみ実測図化した。88は色絵磁器碗である。

SC2（第20図・第21図）

A-3グリッドで検出された。主軸は東西方向にある。検出された限り、 $1.4 \times 1.1\text{m}$ の方形のプランを呈している。遺構の北東隅は調査区外へと延びており、すべて検出されていない。遺構はSB2、SB3それぞれのピットに切られていることからこれよりも古い。遺構断面形は箱形を呈しており、検出面からの深さは0.3mである。SC2からは肥前系磁器、薩摩焼、鉄釘が出土している。近世期に掘り込まれた土坑と考えられる。

89は下層から出土した磁器碗である。外面に牡丹文が描かれる。90は薩摩焼苗代川系の土瓶蓋である。91は鉄釘である。

SC3（第20図）

B-3グリッドで検出された。直径約1.5mの円形プランを呈する土坑である。SC3と隣接してSC4、SC5、SC7も検出されており、SC3はSC5、SC7を切っている。SC3はSB2のピットに切られており、これよりも新しい。このほか、SC3は複数のピットも切っており、床面からはピットの痕跡も検出されている。SC3とSC5の遺構埋土は似通っており、土層断面においてのみ切り合いが把握された。

遺構断面形は逆三角形状の摺鉢状を呈しており、検出面からの深さは0.6mである。遺構埋土はにぶい黄褐色砂質土が堆積し、粘土との混層もブロック状堆積が認められたことから、人為的な埋め戻しによって埋土は堆積したものと考えられる。

遺構上位からは煉瓦片が出土し、下層からは陶器の微細な小片も出土している。遺構の時期は近代と考えられる。

SC4（第20図）

B-3グリッドで検出された。 $1.5 \times 1.1\text{m}$ の略方形を呈する土坑である。一部をSC3とSB3のピットに切られている。遺構断面形は浅い箱形を呈し、検出面からの深さは0.1mほどしかない。

SC4から遺物は出土していない。遺構の切り合い関係を考慮すると、近世期の所産と考えられる遺構である。

SC5（第20図）

B-3グリッドで検出された。大部分はSC3に切られており、これよりも古い。下位からはピットが検出されているが、SC5に切られており、これよりも古いものである。遺構断面形は浅い摺鉢状となり、検出面からの深さは最大で0.5mを測る。

SC5からは鉄滓が出土している。出土遺物はこれ以外にはなく、詳細な時期を推定することは困難である。下位のピットからは陶器鉢（148）が出土している。

SC6（第20図・第21図）

A-4グリッドで検出された。直径約2.5mの円形プランを呈する。調査区の北壁にかかっており、遺構の半分は調査区外へと延びるものと考えられる。遺構断面形は浅い箱形を呈しており、検出面からの深さは約0.5mである。遺構埋土にはガラス小片を含むことから、近現代に掘り込まれたものと考えられる。遺構の床面は隣接するSX3とほぼ同じであり、かつ両者の埋土の特徴もほぼ同一であることから、これらは同一の遺構である可能性が高い。

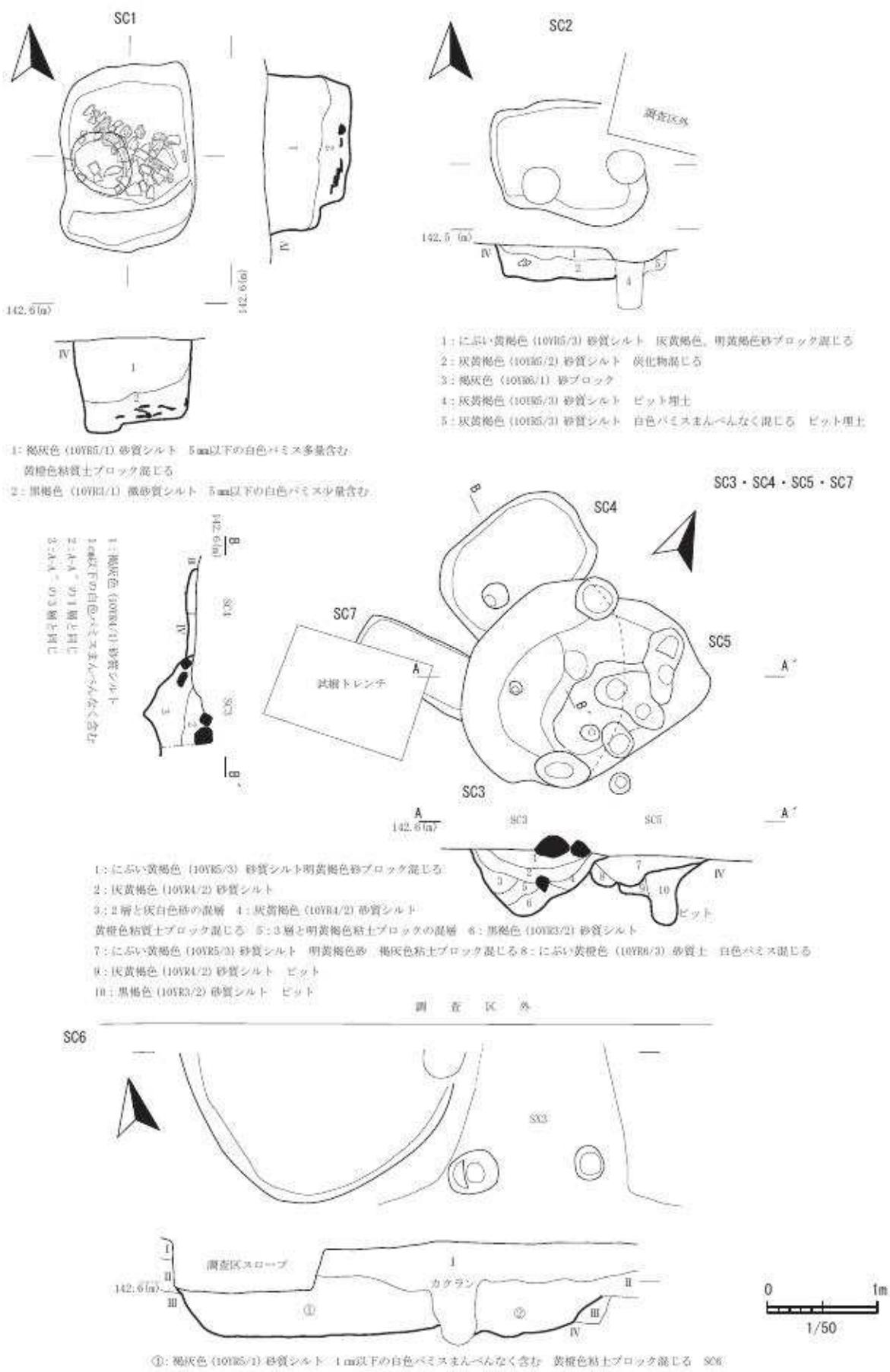
SC6からは肥前系磁器、京焼風色絵陶器の微細な小片（未図化）が出土しているものの、遺構が作られた年代は近代以降の時期と考えられる。

92は肥前系磁器筒形碗である。内面見込みには文様が確認できる。19世紀代以降の製品と考えられる。

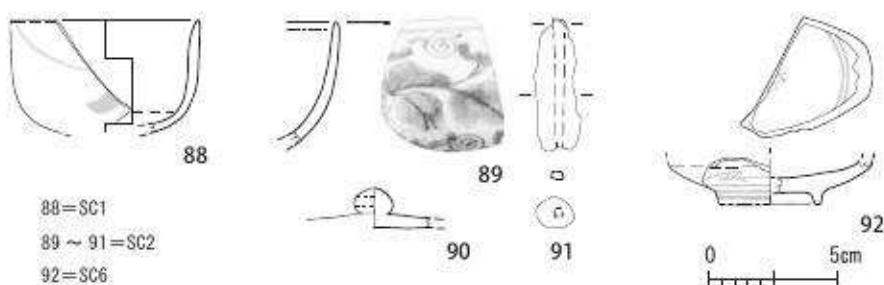
SC7（第20図）

C-3グリッドで検出された。長軸1.0m程度の長方形のプランを呈する土坑である。SC3に切られており、これよりも古い。遺構の深さは検出面から0.1mほどしかなく非常に浅い。

SC7からは遺物は出土していない。よって、遺構の詳細な時期は不明である。



第20図 土坑実測図 (S=1/50)



第21図 土坑出土遺物 (S=1/3)

遺構はSX2のみ部分的な掘下げに留め、SX3は浅かったため、埋土をすべて除去した。これらは遺構範囲の平面図上での図示のみに留めている。なお、これらからの出土遺物は第4節-5「包含層出土遺物」の項中に掲載している。

SX2 (第7図)

調査区の南西隅で検出された、近現代の擾乱と思われる大型の土坑である。調査区の南壁にかかると検出されており、遺構の大半は調査区外へと延びている。南壁付近の深さが最も深く、検出面からも0.5mを測る。少なくとも2回以上の掘り込みが見られる。遺構内からはガラス片やプラスチック等の廃棄物に混在して近世以降の陶磁器片も出土した。

SX3 (第7図)

調査区の東半部で検出された不整形を呈する浅い掘り込みである。平面形は非常に不整な形状を呈しているが、これは複数の掘り込みの切り合いによって生じたものと考えられる。埋土をすべて取り除いた結果、下位からはより古い時期のものと思われるピットが複数検出された。埋土中からは近世～近現代にかけての陶磁器が混在して出土しており、上位において近代の陶磁器がまとまって出土している。この中には幕末期以降の型紙刷り磁器皿やコバルトによって施釉された磁器碗も見られた。

第4節-5 包含層出土遺物 (第22図～第24図)

南御屋鋪跡から出土した包含層出土遺物は、近世から近現代の時期幅で収まるものが多数を占めている。とりわけ、当該期の陶磁器類が卓越して出土しており、その産地、器種も複数のものが認められた。ここでは時期、産地別に整理して報告する。掲載した遺物の中には、近現代のカクランから出土したものも含めている。

陶磁器以外には、近世～近現代に該当すると思われる青銅製品、錢貨、ガラス製品、瓦、土製品、石製品等が出土している。これらについても分類毎に報告していく。出土遺物すべてを実測・掲載することは適わなかったものの、ここでは、遺跡の時期、性格を示すと思われるものを適宜ピックアップして報告する。

南御屋鋪跡から出土した近世陶磁の内、主体を占めるものは薩摩焼であり、これに次いで肥前陶磁が出土している。他に産地不詳の製品も見られ、これらは「不明」として分類した。遺物の時期はやや幅を持つものの、近世中期(18世紀)以降、近代にかけての製品が主体となっている。

このように、包含層出土遺物は近世～近現代を主体としていたが、これら以外に弥生時代もしくは古墳時代と思われる土器のほか、13～16世紀代に位置付けられる貿易陶磁器も少量出土している。

貿易陶磁器 (第22図)

93、94は中世の貿易陶磁器青磁碗で、いずれも大宰府分類龍泉窯系碗Ⅲ類に該当する。93は口縁部が外反し、端部は折り曲げられる。内外面ともに施釉され、外面に蓮弁文が施される。94は内面見込みに文様が認められる。2点とも灰白色素地に緑色釉が掛けられる。

第4節 不明遺構 (SX)

(第7図)

調査区からは、不整形なやや大型の掘り込みも検出された。これらは他の遺構と同様に土層を残しながら掘下げたものの、遺物はガラス片や瓦片等が多量に出土したことから、現代に近い時期の遺構と判断した。

陶磁器（第22図～第23図）

95～116は磁器である。95は薩摩磁器と考えられる碗である。口縁部はわずかに端反りとなる。内面見込みに圓線と吉祥文字と思われる文様が描かれる。外面には丸に六曜文、梅文が描かれる。96は薩摩磁器である。全面に青味がかった釉が掛けられ、高台置付は釉が剥ぎ取られている。内面見込みにはハマの跡が残る。時期は19世紀代と考えられる。97は肥前系碗で外面にはつる草文と思われる文様が描かれ、内面には圓線が描かれる。19世紀代の製品と考えられる。98は肥前系碗底部である。外面には草花文と思われる文様が描かれる。時期は18世紀前半代の可能性がある。99は肥前系碗底部である。内面見込みにハマの跡が残る。100は薩摩磁器碗と考えられる。口縁部はやや端反りとなる。牡丹文が描かれている。19世紀代の資料である。101は近代磁器碗である。コバルトにより山水画が描かれている。102はカクランから出土した磁器碗である。型紙刷りによって鶴が描かれている。近代以降の製品と考えられる。103は18世紀後半から19世紀代にかけての白磁碗で朝顔形を呈するものである。薩摩磁器と考えられる。

104は蕎麦釉の掛かる猪口である。口縁部は端反りとなる。口縁部直下には薄い吳須で飛鳥状の文様が描かれる。肥前系と思われ18世紀代と考えられる。105は瀬戸系の小碗で外面に染色体文が描かれる。106は薩摩磁器の蓋である。全体的に青みがかった釉が掛けられ、外面には唐草文が描かれる。内面見込みには蛇ノ目釉剥ぎが認められる。19世紀代の製品と考えられる。

107～113は皿である。107は薩摩磁器皿である。口唇は口紅となる。内面見込みには山水文帆掛船が描かれる。108は見込みに草花文が描かれる。109は内面見込みに発色の良い吳須で山水文が描かれる。110は肥前系と考えられる。蛇ノ目凹高台を持つ。外面は雀文が描かれ、見込みは型紙刷りによって染付される。中央には梅文、牡丹文が配置され、周囲には松葉文が描かれている。19世紀代の製品と考えられる。111は近代の皿と考えられ、見込み中央に日章旗が描かれている。112、113も近代以降の皿で型紙刷りによって文様が描かれている。

114は肥前系蓋付鉢の蓋である。外面には円文の中に「く」字状の連続して描かれた文様がある。115は鉢である。薩摩磁器と思われる資料である。口縁部は短く折り曲げられる。外面は山水文が描かれ、内面には雲文状の文様が描かれる。116は産地不明の鉢である。口縁部端部がわずかに外反する。コバルトによって染付けされ、外面には草木と思われる文様が描かれる。見込みには圓線の中に二重の円が描かれる。

117は近代以降の青磁小碗である。外面には飛びカンナ状の装飾が施される。118は近代の猪口である。外面には花文が描かれる。内面見込みには「霧島」文字と山が描かれている。「霧島」は焼酎銘柄を指しているものと考えられ、同銘柄が商標登録された昭和8年（1933）^{※1}以降の製品と思われる。119は近現代の合子である。外面には色絵がわずかに描かれる。

120～136、138～151は陶器である。120は関西系碗口縁部である。121は関西系筒形碗と思われる。122～126は堅野系白薩摩と考えられる製品である。122、123は碗底部である。124は碗底部でピットから出土している。腰部外面に吳須による千鳥印が2羽描かれる。125は猪口あるいは餌鉢と考えられる製品である。底部には釉は掛けられない。126は瓶の頸部である。外面は施釉され、細かな貫入が認められる。内面は露胎である。

127は外面に象嵌が認められることから、いわゆる「三島手」に該当する。小片のため器種は不明であるが、小型の製品と考えられる。横方向の沈線の上に花弁形の文様が描かれている。象嵌部には白色土が流し込まれている。128は碗底部である。文様は確認できないものの、素地の特徴は127と非常に似通っていることから、三島手である可能性が高い。127、128とも非常に硬質である。時期は不明である。

129は瓶である。肥前系の製品で、二彩唐津と思われ、外面には刷毛目による波状文が巡り、その上に部分的に褐釉が振りかけられている。内面は露胎である。17世紀末～18世紀代の製品の可能性がある。

130～135は碗である。130は薩摩焼加治木・姶良系（山元窯か）碗で腰折形の器形を呈する。灰白色素地に透明釉が全体に掛けられる総釉であり、高台置付のみ釉剥ぎされる。抹茶碗を模したものと思われ、17世紀後半代の可能性がある。131は龍門司系統である。褐釉が掛けられる。132は産地不明の碗と考えられる製品である。口縁部に屈曲を持つ。口唇部と体部屈曲部よりも下に色が塗られる。133は肥前系螢手碗である。腰折形の器形を呈し、高台置付は釉剥ぎである。外面と見込みに円文が認められる。134は肥前系陶器碗である。内面見込みには釉掛けされるが、高台外面は露胎である。胎土は砂粒を多く含む。内面見込みには胎土目が残る。初期の肥前系製品と考えられる。135は龍門司系統である。外面は白土掛けで透明釉が乗せられる。内面見込みには蛇ノ目釉剥ぎが認められる。19世紀前半代と考えられる。

136は関西系陶器の蓋と考えられる製品である。黄味の強い釉が掛けられ、外面には沈線文が巡る。137は白磁の

仏飯器である。釉の特徴から薩摩磁器と考えられる。138は肥前系の仏飯器である。褐釉が掛けられる。139は龍門司系と考えられる鯫肌釉鉢である。内面、底面は露胎である。近世後期以降の製品と考えられる。140は汽車土瓶の可能性がある。外面上半のみ釉掛けされ、それ以外は露胎である。近代以降の製品と考えられる。

141は苗代川系土瓶の注口部である。内面は3ヶ所穿孔されている。142は苗代川系植木鉢である。口縁部断面形は逆L字状である。18世紀後半以降の製品である。143は苗代川系摺鉢である。片口で内面には摺目が残っている。18世紀前半～中頃の製品である。144は産地不明の鉢である。浅黄橙色の素地に透明釉が掛けられる。底部は露胎で内面見込みに目跡が残っている。145は珉平焼と思われる鉢である。器面全体に発色の良い黄色釉が掛けられている。

146は窯道具と考えられる。苗代川系の呼称で「ガンギ」と呼ばれる製品に該当する。底部は切高台で波状となる。147は火鉢と考えられる。外面には緑色、白色の釉が掛けられ、内面は露胎である。瀬戸美濃系と思われ、近現代の製品と考えられる。148は産地不明（福岡産か）の鉢である。ピットから出土した。外面は高台付近まで褐色釉が掛けられ、その上に青～緑色の釉が垂れながら掛けられている。149は鉢である。皿形の器形を呈する。近現代の陶器である可能性もある。150は合子蓋で、上面は深緑の釉薬によって施釉され、陽刻で羽を広げた鶴が模られている。

151は全面露胎の鉢である。胎土は土師質である。植木鉢の可能性があり、近現代の製品と考えられる。

磁器製品（第24図）

152は白磁の人形である。恵比須像である。非常に光沢を持つ釉が掛けられる。底面には芯通しの孔が認められる。近世後期から近代の所産と考えられる。

土製品（第24図）

153～155は土人形である。153、154は大黒天である。153は顔面、154は小槌を持つ手の部分に該当する。両個体とも相似した胎土であることから、同一個体の可能性がある。155は何を現しているか不明であるが、人物の足の部分と思われる。いずれの製品も近世後期から近代の所産と考えられる。

ガラス製品（第24図）

156～159は近代以降に製造されたガラス瓶である。156は目薬瓶で表面に「加村目薬」、裏面に「加村薬房」の陽刻が見られる。青色のガラス瓶である。157は薬瓶で表面に「神薬」と陽刻される。青色のガラス瓶である。158はインク瓶で表面に「墨の元」の上に「●」の陽刻が見られる。透明のガラス瓶である。159は薬瓶で「SS」の陽刻が見られる。茶色のガラス瓶である。

プラスチック製品（第24図）

160はプラスチック製の歯ブラシである。白色のプラスチックを素材とし、グリップ部の表面に「(完全消毒) 大王歯刷子 25」と陰刻される。近現代の遺物である。

瓦（第24図）

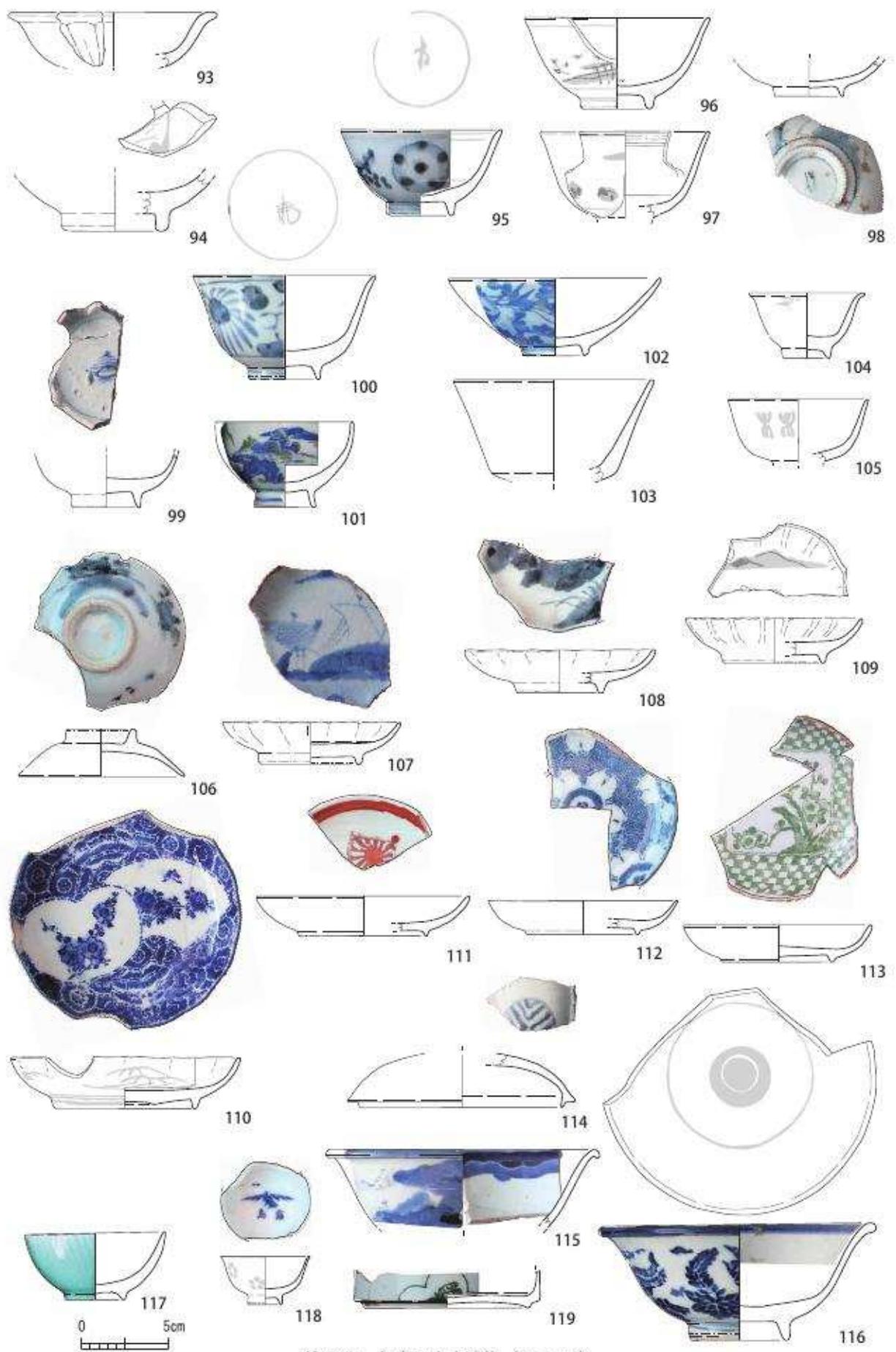
161は丸瓦で内面には布目压痕が残されている。被熱しており、ススが付着している。近世期の瓦片と思われる。162は飾り瓦の一部と考えられる。表面には家紋のような文様と沈線が描かれている。内面には接合跡が残っている。カクランから出土したものである。近世～近現代の時期のものと考えられる。

石製品（第24図）

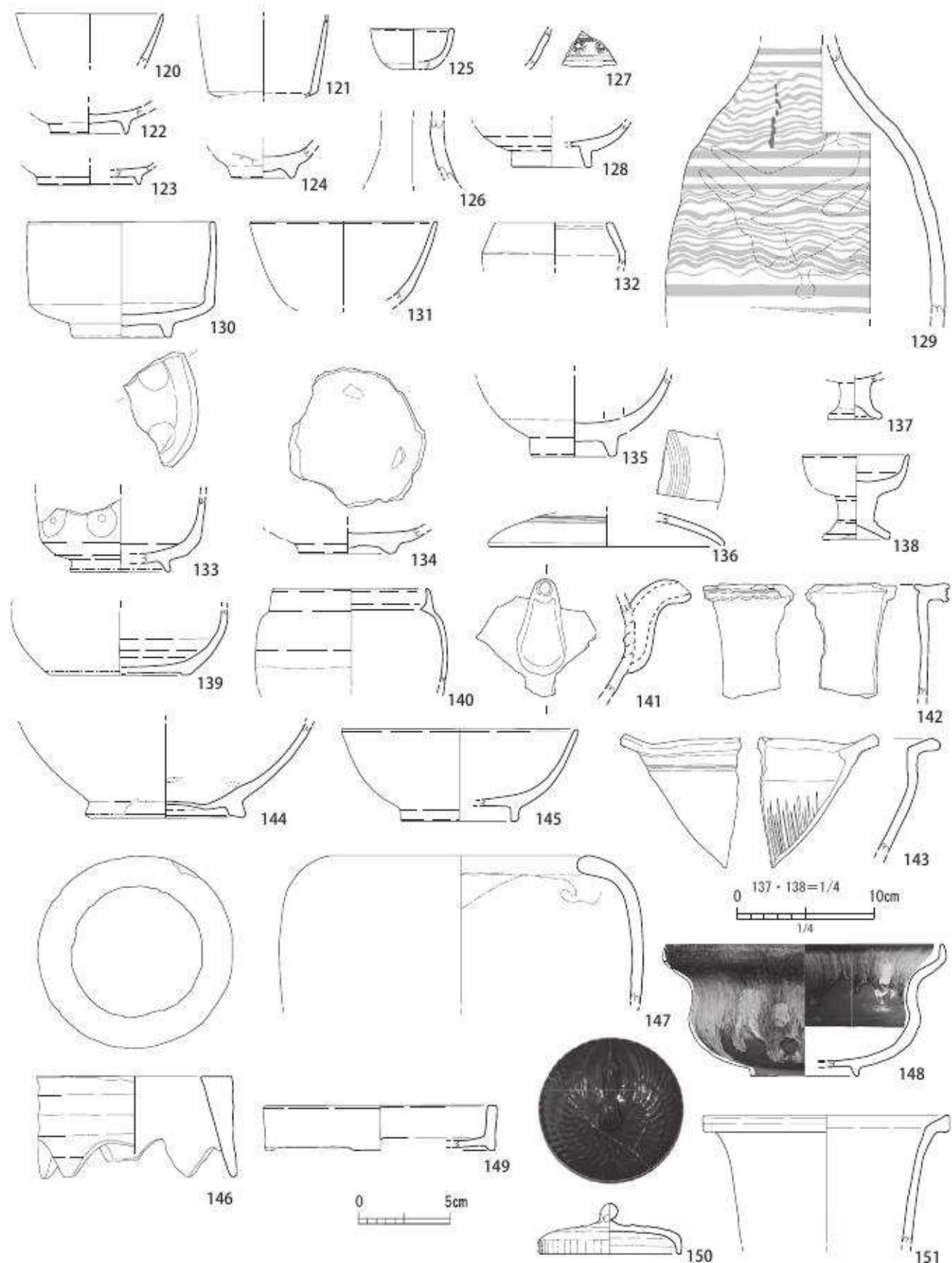
163はミニチュア硯である。長さは4.2cm、幅は2.2cmである。外形は角が立つように整形され、硯の形状が細やかに表現されている。石材には天草陶石が使用されている。同様の遺物は、庄内小学校遺跡（安永地頭仮屋跡 都城市教委2010）において、滑石製のものが出土している。

銭貨（第24図）

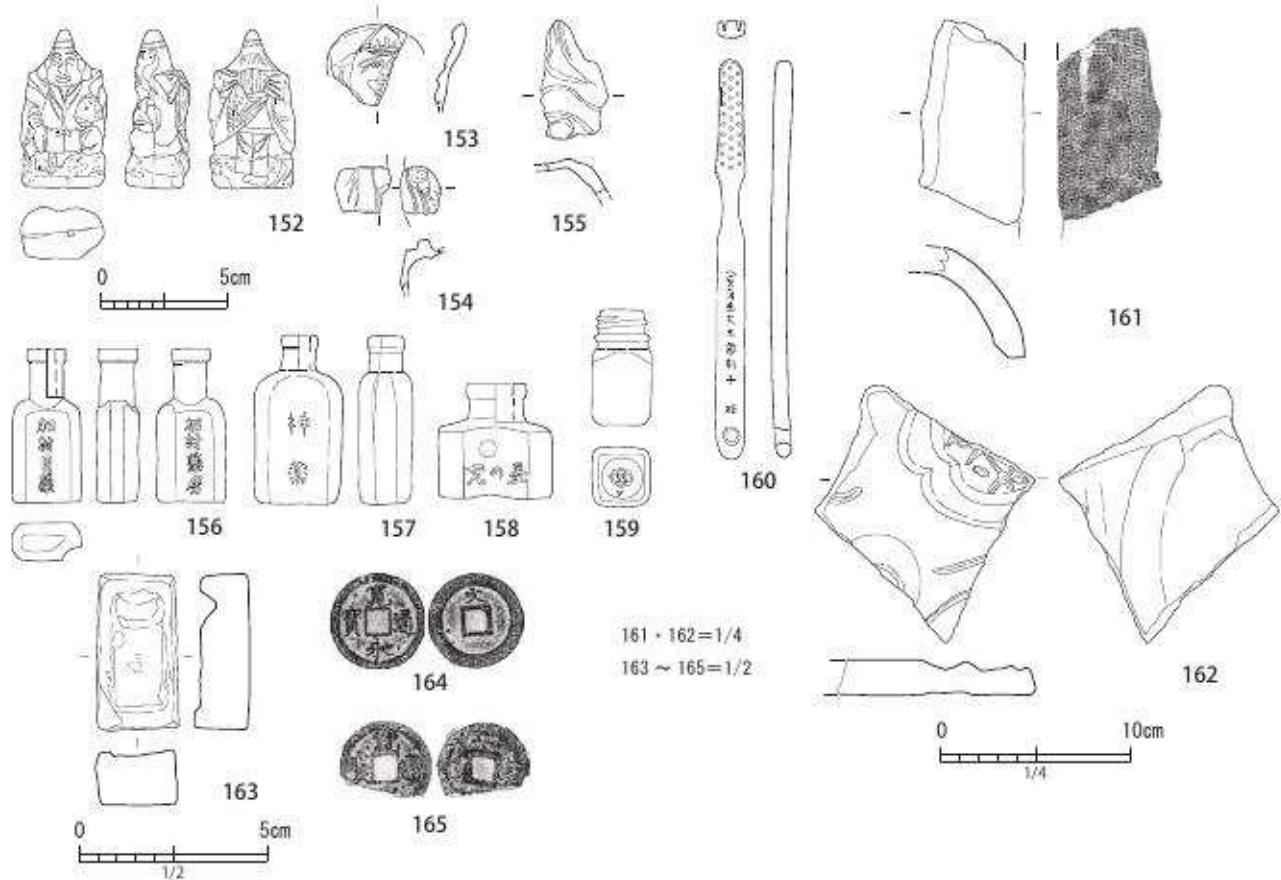
銭貨も少量ながら出土している。164、165は寛永通寶である。背面には「文」の文字が鋳出されていることから、「新寛永」となる。



第22図 包含層出土遺物 (S=1/3)



第23図 包含層出土遺物② ($S=1/3 \cdot 1/4$)



第24図 包含層出土遺物③ ($S=1/2 \cdot 1/3 \cdot 1/4$)

ピール缶（写真図版6）

カクラン土坑からはピール缶も廃棄された状態で出土した。缶はスチール製で、ブルタブではなく、缶切りによつて開缶するものである。缶の形状の特徴から昭和33年（1958）に日本国内で販売されたもの^{※2}と同一と思われる。

【引用・参考文献 ホームページ】

鹿児島県教育委員会 1983「鹿児島（鶴丸）城本丸跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（26）

都城市教育委員会 2010「庄内小学校道路」都城市文化財調査報告書（100）

※1 琴島酒造株式会社ホームページ（URL：<http://www.kirishima.co.jp/company/history.html>）より

※2 アサヒグループホールディングスホームページ（URL：<http://www.asahigroup-holdings.com/company/history/>）より

第1表 南御屋鋪跡出土遺物観察表①

探査番号	出土遺構/施設名	層位	分類	器種	系統等	系統等	法量(cm)			文様		胎土	備考	
							口径	底径	厚さ	(内)	(外)			
1	SD6	F	土師器	壺			—	—	—			微細褐色砂	平安時代か	
2	SB1P1	上	陶器	碗	薩摩焼	堅野系白薩摩	—	45	—			微細黑色砂		
5	SB2	上	陶器	碗	薩摩焼	龍門司系か	—	—	—			精良		
6	SB3	下	陶器	碗	薩摩焼	龍門司系	—	—	—			精良		
7	SB2(門状造形)	上	陶器	碗	肥前系		—	40	—	○		精良	18C後半～19C代か	
8	SB2(門状造形)	中	陶器	碗	薩摩焼	龍門司系	12.2	—	—			精良	見込み：蛇ノ目釉調	
9	SB2(門状造形)	中	陶器	碗	薩摩焼	堅野系白薩摩	—	—	—			微細黑色砂		
10	SB2(門状造形)	中	陶器	横鉢	薩摩焼	苗代川系	—	—	—	横目		微細白色砂		
11	SX1	中	貿易陶磁	皿	青花	津浦窯系	—	5.0	—	模印人物	○	黑色砂	焼成：やや軟質 16C代	
12	SX1	上	貿易陶磁	碗	青花	津浦窯系	—	4.4	—			花文・真露	精良 16C代	
13	SX1	F	土師器	碗	堅野系小鹿野田器		10.7	—	—	—		荷葉唐草文	精良	
14	SX1	F	土師器	蓋委口	肥前系		—	7.4	5.0	5.7		花文	精良 18C後半～19C代か	
15	SX1	上	磁器	碗	肥前系		—	4.6	—	五弁花文	裏路「大明年製」	精良	18C代	
16	SX1	上	磁器	皿	肥前系		14.0	8.8	4.1	荷葉唐草文	梅文	黑色砂	折線口縁 18C後半	
17	SX1	F	土師器	皿	肥前系		—	13.5	8.0	3.2	淡状觀音・五弁花文	花文	精良 18C後半	
18	SX1	上	磁器	猪口	肥前系		—	6.0	—			花文	精良	
19	SX1	上	磁器	猪口	肥前系か		—	2.4	—	○		花文	精良	
20	SX1	一括	磁器	盤	肥前系		—	—	4.0			花文	精良	
21	SX1	一括	磁器	蓋	肥前系		—	8.4	—			花文	精良	
22	SX1	一括	磁器	小壺	肥前系か		—	6.0	—			花文	精良	
23	SX1	上	磁器	碗			—	3.3	—			花文	近現代	
24	SX1	上	磁器	碗			—	4.9	—			花文	近代か	
25	SX1	一括	磁器	筆洗			—	11.6	9.3	3.4		花文	近代か	
26	SX1	一括	陶器	碗	関西系	京・信楽系	7.1	—	—			花文	精良	
27	SX1	一括	陶器	碗	関西系	京・信楽系	—	—	—			花文	小杉柄の可窓性あり 18C後半	
28	SX1	一括	陶器	碗	薩摩焼	堅野系白薩摩	—	—	—			微細黑色砂		
29	SX1	一括	陶器	碗	薩摩焼	元立院系	8.4	—	—			花文	精良	
30	SX1	中	陶器	碗	肥前系		—	11.0	4.1	6.0		微細黑色砂	見込み：蛇ノ目釉調	
31	SX1	中	陶器	碗	薩摩焼	龍門司系	8.7	—	—			花文	見込み：蛇ノ目釉調	
32	SX1	上	陶器	碗	薩摩焼	龍門司系	11.8	—	—			花文	18C前半	
33	SX1	中	陶器	碗	薩摩焼	龍門司系か	—	3.3	—			花文	精良	
34	SX1	上	陶器	碗	薩摩焼	龍門司系	9.6	4.8	3.9			花文	焼成：やや軟質	
35	SX1	中	陶器	碗			—	14.6	5.7	6.4		2mm以下褐色・白色砂	抹茶碗写しか	
36	SX1	上	陶器	碗	薩摩焼	龍門司系	—	4.7	—			花文	精良	
37	SX1	上	陶器	碗	薩摩焼	龍門司系	—	5.8	—			花文	焼成：やや軟質	
38	SX1	中	陶器	碗	薩摩焼	龍門司系	—	4.4	—			花文	精良	
39	SX1	上	陶器	碗	薩摩焼	龍門司系	—	3.4	—			花文	精良	
40	SX1	上	陶器	土瓶	薩摩焼	苗代川系	—	5.3	3.1			微細黑色砂		
41	SX1	上	陶器	土瓶	薩摩焼	苗代川系	—	—	—			微細黑色砂	18C後半以降	
42	SX1	下	陶器	鉢	薩摩焼	苗代川系	31.6	16.0	10.7			2mm以下白色砂	18C後半	
43	SX1	上	陶器	鉢	薩摩焼	苗代川系	35.9	—	—			2mm以下白色砂	18C前半	
44	SX1	一括	陶器	鉢	薩摩焼	苗代川系	28.2	—	—			花文	精良	
45	SX1	上	陶器	鉢	薩摩焼	苗代川系	24.5	13.2	12.5			2mm以下赤褐色・白色砂	19C以降	
46	SX1	中	陶器	大壺	薩摩焼	苗代川系	—	—	—			微細褐色・白色砂	19C代	
47	SX1	上	陶器	植木鉢			—	22.8	—	—		微細褐色砂	焼成：土師質 近現代	
48	SX1	中	陶器	植木鉢			—	14.6	—	—		花文	焼成：土師質 近現代	
49	SX1	上	陶器	植木鉢			—	—	—			花文	焼成：土師質 近現代	
50	SX1	上	陶器	甕			—	20.5	—	—				近代
51	SX1	上	陶器	甕			—	18.5	—	—				内面目盛あり（跡）
57	SD1	下	磁器	碗	肥前系		—	—	—			直線文	精良	
58	SD1	上	磁器	碗	箱口		—	8.2	—	—		染色体文	精良	
59	SD1	上	陶器	鉢	薩摩焼	苗代川系	—	—	—			沈線文	微細白色砂	
60	SD1	上	陶器	鉢			—	—	—			微細黑色砂	近現代	
61	SD1	F	土師器	香炉			—	11.4	8.7	5.1		雀文	精良	近代
62	SD2	上	土師器	紅皿	肥前系		—	7.1	4.3	1.6	菊花型押		精良	18C代

第2表 南御屋鋪跡出土遺物観察表②

探査番号	出土遺構・施設名	層位	分類	器種	系統等	系統等	法量(cm)			文様		胎土	備考
							D径	B径	厚	(内)	(外)		
63	SD2	F	磁器	猪口	肥前系		—	35	—		○	精良	
64	SD2	上	磁器	猪口	肥前系		5.4	3.6	3.4			精良	
65	SD2	上	磁器	III	肥前系		—	16.4	—	葡萄唐草文	○×文	精良	18C中葉～末
66	SD2	中	陶器	碗	関西系	京焼	9.7	—	—		色繪	精良	燒成：やや軟質
67	SD2	中	陶器	碗	肥前系	京燒風陶器	—	3.7	—			精良	燒成：やや軟質
68	SD2	中	陶器	钵(鉢身か)	薩摩焼	堅野系白薩摩	8.6	4.1	4.0			微細黑色移	燒成：やや軟質
69	SD2	一精	陶器	小皿	薩摩焼	堅野系白薩摩	6.3	—	—			精良	
70	SD2	下	陶器	碗	薩摩焼	元立院系	—	—	—			微細褐色移	黒釉
71	SD2	上	陶器	碗	関西系		7.8	—	—			精良	
72	SD2	一精	陶器	碗			8.9	4.6	7.8			微細褐色移	黒釉胎 烧成：土師質
73	SD2	中	陶器	碗	薩摩焼	龍門司系	—	35	2.3			精良	
74	SD2	下	陶器	钵(鉢身か)			9.5	—	—			微細褐色移	茶器か
75	SD2	上	陶器	土瓶	薩摩焼	苗代川系	—	45	2.9			白色移	
76	SD2	上	陶器	土瓶	薩摩焼	苗代川系	—	—	—			白色、黒褐色移	
77	SD2	上	陶器	土瓶	薩摩焼	苗代川系	8.6	6.5	9.3			2mm以下白色移乱じる	18C後半以降
80	SD2	上	陶器	鉢	薩摩焼	苗代川系	—	15.1	—	擂目		2mm以下白色移	
82	SD3	F	磁器	紅皿	肥前系		5.2	2.9	1.4			精良	18C前半代か
83	SD3	一精	陶器	碗	薩摩焼	龍門司系	—	45	—			精良	
84	SD3	上	陶器	平碗	関西系	京焼	—	47	—	色繪		精良	18C代
85	SD4	一精	陶器	蓋	薩摩焼	龍門司系	—	6.6	—			精良	18C代
86	SD4	上	陶器	碗	薩摩焼	龍門司系	—	4.4	—			精良	18C代
88	SC1	中	磁器	碗		近現代	7.4	—	—		色繪	精良	
89	SC2	下	磁器	碗	肥前系		—	—	—		牡丹文	精良	
90	SC2	中	陶器	土瓶	薩摩焼	苗代川系	—	—	1.6			微細白色移	
92	SC6	上	磁器	碗	肥前系		—	40	—	吉祥文字	○	精良	19C以降
93	B4	II	貿易陶磁	碗	龍泉窯系青磁	龍泉窯系青磁II類	12.0	—	—		蓮瓣文	精良	
94	C5	II	貿易陶磁	碗	龍泉窯系青磁	龍泉窯系青磁II類	—	6.2	—			微細褐色移	
95	C5	II	磁器	碗	薩摩磁器		9.2	3.8	4.9	吉祥文字	丸に六瓣文・梅文	精良	19C代
96	C5	II	磁器	碗	薩摩磁器		10.6	4.2	5.3		山水文	精良	19C代
97	SX3	中	磁器	碗	肥前系		9.7	—	—		つる草文	精良	19C代
98	B4	II	磁器	碗	肥前系		—	39	—		草花文	精良	18C前半
99	C5	II	磁器	碗	肥前系		—	40	—	吉祥文字		精良	近代
100	C5	II	磁器	碗	薩摩磁器		10.5	4.0	6.0	吉祥文字	牡丹文	精良	19C代
101	B5	II	磁器	碗			7.9	3.6	5.0		山水文	精良	近現代
102	カラン	—	磁器	碗			12.1	3.7	4.4		鶴文	精良	近現代
103	C3	II	磁器	碗	薩摩磁器		11.4	—	—			精良	側顔形 19C代
104	B4	II	磁器	猪口	肥前系		6.4	3.8	2.6		飛鳥文	精良	
105	C5	II	磁器	小碗	龍口		8.0	—	—		慶色体文	精良	幕末期
106	SX3	中	磁器	蓋	薩摩磁器		9.5	4.0	2.8		唐草文	精良	見込み：越ノ日雅周吉 19C代
107	C5	II	磁器	III	薩摩磁器		10.2	5.9	2.5	山水文帆掛船		精良	19C代か
108	C5	II	磁器	III	肥前系小薩摩磁器		11.0	5.0	2.5	草花文		精良	19C代
109	SX3	中	磁器	III	肥前系		10.2	5.9	2.6	山水文		精良	19C代
110	C5	II	磁器	III	肥前系		13.1	8.2	3.0	梅文・牡丹文・松葉文	萩文	精良	鶴ノ日四喜台 19C代
111	カラン	上	磁器	III			12.2	7.4	2.3	日章旗		精良	近代
112	B5	II	磁器	III			10.9	6.4	2.0	花文		精良	近現代
113	カラン	—	磁器	III			10.8	6.4	2.1	梅文		精良	近現代
114	B5	II	磁器	蓋付鉢	肥前系		11.6	(13.0)	—		円文	精良	
115	C5	II	磁器	鉢	薩摩磁器		15.6	—	—	墨文	山水文	精良	19C代
116	B5	II	磁器	鉢			15.9	5.8	16.7	円文	草木文	精良	コバルト釉 近代か
117	B5	II	磁器	碗			8.0	3.4	3.9			精良	近現代
118	B5	II	磁器	猪口			5.1	2.0	2.8	「露島」文字	花文	精良	近現代
119	B5	II	磁器	合子(身)			—	9.4	—		色繪	精良	近現代
120	カラン	—	陶器	碗	關西系	京・信楽系	8.0	—	—			精良	
121	C5	II	陶器	碗	關西系	京・信楽系	—	—	—			精良	小移病か
122	カラン	—	陶器	碗	薩摩焼	堅野系白薩摩	—	42	1.5			微細黑色移	

第3表 南御屋鋪跡出土遺物観察表③

探査番号	出土遺構・施設名	層位	分類	器種	系地等	系統等	法量(cm)			文様		胎土	備考	
							口径	底径	厚	(内)	(外)			
123	カクラン	—	陶器	III	薩摩焼	笠野系白薩摩	—	8.4	1.6			精良		
124	ピット	中	陶器	碗	薩摩焼	笠野系白薩摩	—	3.3	1.7		千鳥印	微細黒色移	休部下半に千鳥印(吳領)	
125	A5	II	陶器	粗(酒呑)	薩摩焼	笠野系白薩摩	4.6	2.2	2.3			精良		
126	C3	II	陶器	瓶	薩摩焼	笠野系白薩摩	—	—	—			精良		
127	カクラン	—	陶器	碗	薩摩焼	三島手	—	—	—		象嵌	精良		
128	C5	II	陶器	碗	薩摩焼	三島手か	—	4.4	—			精良		
129	B5	II	陶器	瓶	肥前系		—	—	—	波状文・直線文		精良	二彩唐津 18C代か	
130	C5	II	陶器	瓶	薩摩焼	加治木・蛤良系	10.3	6.4	5.5			微細黒色移	休部兩写しが17C後半代の可能性	
131	C3	II	陶器	碗	薩摩焼	加治木・蛤良系	10.1	—	—			精良	17C後半	
132	B3	II	陶器	碗			—	6.4	—			精良	近現代か	
133	C5	II	陶器	碗	肥前系		—	5.4	—		蓮手	精良	18C前半	
134	C5	II	陶器	碗	肥前系		—	5.2	—			2mm以下黒色移	胎土日 17C初期	
135	SX3	上	陶器	碗	薩摩焼	龍門司系	—	4.7	—			褐色移	18C前半か	
136	C3	II	陶器	蓋	関西系		13.0	—	—		沈線文	精良		
137	カクラン	—	陶器	伝熱器	肥前系		—	4.4	3.6			精良		
138	C5	II	陶器	伝熱器	薩摩焼	龍門司系	5.8	3.6	4.6			精良		
139	カクラン	—	陶器	鉢	薩摩焼	龍門司系	—	7.6	—			精良	板乳釉	
140	カクラン	—	陶器	蓋付鉢			—	8.5	—	5.3		微細黒色移	汽車土瓶か 近代以降	
141	C6	II	陶器	土瓶	薩摩焼	苗代川系	—	—	—			微細陶色移		
142	C5	II	陶器	甕	薩摩焼	苗代川系	—	—	—			2mm以下褐色、白色移	18C後半	
143	B2	I	陶器	横鉢	薩摩焼	苗代川系	—	—	—			1cm以下褐色、白色移	18C前半～中	
144	B5	II	陶器	鉢			—	8.9	—			精良	見込み目跡あり 近代か	
145	カクラン	—	陶器	鉢			—	12.9	6.2	5.0			精良	近代、環平焼か
146	カクラン	—	陶器	ガング			—	10.6	10.6	5.5			白色、赤褐色移	関道具 切高台
147	B5	II	陶器	鉢(火鉢)	蘭戸・美濃		—	14.0	—	—			2mm以下黒色移	近現代
148	ピット	中	陶器	鉢	福岡が		—	15.0	5.8	7.2			精良	近現代
149	カクラン	—	陶器	鉢			—	19.0	18.6	3.7			微細白色移	
150	B5	II	陶器	蓋			—	7.8	—	2.8	鶴の彫刻	精良	近現代	
151	A5	II	陶器	鉢			—	13.6	—	—			精良	近現代

第4表 南御屋鋪跡出土遺物観察表④

探査番号	出土遺構・施設名	層位	分類	分類②	計測値(cm)			重量(g)	材質等	備考
					長	幅	厚			
4	SB1	上	石製品	石塔か	12.8	15.8	12.8	4400.0	礫灰岩	台座部
52	SX1	上	石製品	火打石	5.2	4.9	3.7	720	メノウか	
53	SX1	中	土製品	塔塔	5.2	5.4	—			
54	SX1	中	金屬製品	キセル(鍔管)	2.2	0.9	0.9		青銅	
55	SX1	上	金屬製品	刀装具(鐔)	5.3	4.4	0.4		真鍮	
56	SX1ピット	下	瓦	瓦板丸	22.1	14.9	—			
78	SD2	一括	土製品	台形	4.3	6.4	—			
79	SD2	中	土製品	鉢形	13.8	21.0	—	(重高) 16.9		
81	SD2	上	土製品	板状	7.9	13.0	1.0			
87	SD4	下	瓦	平瓦	23.4	12.1	2.0		「吉」銘あり	
91	SC2	下	鐵製品	釘	5.2	1.8	1.3			
152	B6	II	磁器製品	白磁人形	6.3	3.4	2.6			恵比須
153	調査区	一括	土製品	土人形	3.3	3.1	1.3			大黒天 赤色顔料付着
154	C2	II	土製品	土人形	1.9	1.6	2.1			大黒天
155	SX3	—	土製品	土人形	4.7	2.6	1.5			足の部分
156	カクラン	—	ガラス製品	瓶	6.1	2.7	1.6		ガラス(青)	「加村日葵」「加村義房」陽刻
157	カクラン	—	ガラス製品	瓶	6.7	3.9	2.1		ガラス(青)	「神葵」陽刻
158	B5	II	ガラス製品	瓶	4.6	4.5	—		ガラス(透明)	「墨の元」陽刻
159	カクラン	—	ガラス製品	瓶	4.6	2.3	2.3		ガラス(茶)	「SS ア」陽刻
160	C3	—	ハブラシ(齒刷子)		15.9	1.2	0.7		プラスチック	「完全消毒」大王歯刷子」陰刻
161	B5	II	瓦	丸瓦	10.9	5.5	1.5			内面有目鉢 硬熱有
162	カクラン	—	瓦	筋り瓦か	12.7	11.7	1.9			家紋状の文様あり
163	C5	I	石製品	ミニチュア鏡	4.2	2.2	1.5	26.5	天草陶石	
164	調査区外	—	錢貨	寛永通寶	—	—	—			新寛永
165	B4	II	錢貨	寛永通寶	—	—	—			新寛永

第4章 総括

検出遺構について

今回調査した南御屋鋪跡の概要については、『庄内地理誌』（以下、地理誌）卷26（都城市史編さん委員会（編）2001）に記されている。これによれば、島津久茂が屋敷を築くまで、この地域は水田地帯であったとされる。今回の調査では、近世の遺物包含層であるⅡ層の下位に、水田層であるⅢ層が調査区のほぼ全面に堆積していることも分かった。Ⅱ層から検出された近世の遺構、遺物が18世紀以降のものが大半であることを考慮すると、地理誌の記述にも符号するものと言える。

今回の調査で検出された近世以降の遺構のうち、最も古い段階に位置付けられるのはSD2と考えられ、18世紀後半の特徴を持つ遺物が多数出土している。SD2はその構造から排水溝としての機能が考えられるが、これは後述するよるに南御屋鋪屋敷地の排水を主目的として掘り込まれたものと推定される。調査区の北端でSD2と交わるSD4もこれと同時期と思われる。

検出された遺構群は主軸方向にも一定の規則性が見出され、先述した溝状遺構に加え、ピット列（SB2・SB3）は概ね北東-南西方向の主軸を持つ。さらに調査区の西端から検出された階段状遺構SX1、掘立柱建物跡SB1はこの軸に直交する主軸を持つことは注目される。これらの時期は同時期か近接した時期と考えられる。

さらに、幕末期から近代にかけての時期と思われるSD1、SD3も同方向の主軸をもつことから、19世紀代にかけても同方向の主軸による規制が存在していた可能性がある。このほかにも調査区内では多数のピットが検出されており、一部には根石を持つものもあったことから、調査区内には確定できた建物以外のものが存在していたことは確実である。

出土遺物について

今回の調査で出土した遺物のうち、近世陶磁器の年代は、18~19世紀代のものが主体である。基本的には、在地製品である薩摩焼と肥前系磁器によって大半は構成され、これらの他に少量の他地域産陶磁器が加わる組成となる。このような特徴は鹿児島藩内における近世陶磁の様相と同様である。

近世段階で最も古い段階に位置付けた溝状遺構SD2からは白薩摩や京焼等、この地域における陶磁器組成の中でも上位に位置付けられる優品が出土している。さらに、遺構外でも近代以降のカクラン土坑から出土しているものも含め、豊野系の製品が一定量出土していることが本遺跡の特徴として挙げられる。これらの中には、(124) のように千鳥印を施すものも認められる。

このほか、これも遺構外からではあるものの、少量の三島手（127）も出土している。都城市内では、都城島津家老クラスの屋敷地として比定されている八幡遺跡（宮崎県埋セ2003）において三島手鉢が出土しているほか、宮崎県内では、宮崎市高岡麓遺跡（宮崎県教委1996）において、「肥前系陶器」三島手として、同タイプ鉢の出土が報告されている。また、最近では宮崎市佐土原城跡（宮崎市教委2016）において豊野系製品の可能性のある碗が報告されている。このように三島手は宮崎県内ではごく少量の出土例が知られているのみで、出土遺跡は武士階層居住地に限られている。鹿児島藩内において、このような三島手を含む豊野系製品の出土事例と遺跡の階層性については、一定の相関性も認められている（渡辺2000）。ことからも今回の調査地点が上級武士層の居住地である蓋然性は高いと言えよう。

在地製品である薩摩焼の様相を見ると、特に、遺構内から多く出土している龍門司系製品は総釉のものが大半であり、18世紀中葉以降の特徴を持つものが多数を占めている。このほかに苗代川系の製品（鉢、土瓶等）も少なからず見られた。また、平佐窯系と思われる薩摩磁器も比較的多く認められた。これらは18世紀後葉から19世紀にかけての時期のものであり、都城市内における他の近世遺跡からも一定量出土しており、都城島津家領内においても普及している状況が認められている（堀田2013）。

肥前系磁器は大橋康二氏による肥前陶磁編年（大橋1993）のIV~V期に該当する磁器がまとまって出土しており、とりわけ碗、皿、猪口等の18世紀後半以降の日常製品が認められる。このほか、幕末~近代のものは、瀬戸・美濃系のほか複数産地のものが認められる。

さらに、窯道具（ガンギ）（146）が出土していることも注目される。類似品は都城市内に所在する小松原窯跡（都城市史編さん委員会（編）2005）でも出土している。この製品は苗代川系の窯道具とされ、主に甕や鉢等の大型の製

品を焼成する際に使用されたものと考えられている（鹿児島県埋セ2003）。

陶磁器以外の遺物について見ると、土製品、石製品等が出土している。中でもミニチュア硯（163）は類例が安永地頭仮屋跡である庄内小学校遺跡（都城市教委2010）から滑石製のものが出土している。この遺物も上級武士層の居住地域から出土している点において共通しており、注目される。

このほか、SB1からは供養塔と思われる石製品（4）が出土しており、付近には墓域あるいはそれに類する空間が存在していた可能性がある。

南御屋鋪跡絵図との比較

地理誌卷26に収録されている南御屋鋪の絵図（第25図）には、姫城川の川岸から屋敷地が占地し、南へと広がっている様子が描かれている。絵図はやや鳥瞰的に描かれており、調査地点対岸の姫城山から見た配置と推定される。絵図の右下端（北端）に描かれた「御門」は「ハシ（橋）」の正面に描かれている。地理誌によれば、御門の北には板橋が架けられ、その川向には番所も設けられていたという。また、絵図では納殿、御米と描かれている貯蔵施設は川に近接した位置にあり、姫城川の水運を意識して建てられていたようである。

絵図では川岸と平行して柵列、漆喰塀と思われる施設が描かれており、下端に描かれている「式間長屋」を境として、御門側に漆喰塀、反対側に柵列が設置されていたようである。式間長屋の隣には「キザ（階段）」が描かれており、屋敷地と川岸に高低差があったことが示されている。この場所には「裏門」とも記されており、屋敷地内への出入口が存在していたようである。これよりも東側にかけては屋敷地と川の高低差は無くなっていくようであり、屋敷地へ上がる為の施設は描かれていない。

絵図中「御書院上段」や「鶴松様御座」として描かれている屋敷の主要な建物は中央に描かれ、複数の建物から成り、部屋も多く存在していたことが分かる。南には庭園が築かれており、蓬莱山を模した築山が作られる等、その規模も広大であったと推定される。

ちなみに、「鶴松様」とは、久茂の四女（宝暦5年（1755）～文政10年（1827）、島津内膳久丘室）のことであり、絵図中「鶴松様御座」の東には「御乳詰所」と描かれている。このことから、絵図は鶴松がまだ幼少期の時期、すなわち南御屋鋪が築かれて間もない時期の配置を示している可能性が高い。

館を含む屋敷内には中門や塀と思われる構造物も描かれていることから、複数の区画によって隔てられていたようである。御書院正面の御玄関前には「定舞台」と描かれた能舞台があり、御書院のさらに奥、南西側へと突き出した位置に庭園が広がっている。その中には、「キンケイ」、「孔雀」等鳥禽類の名前が描かれていることから、複数種の動物が飼育されていたことが分かる。

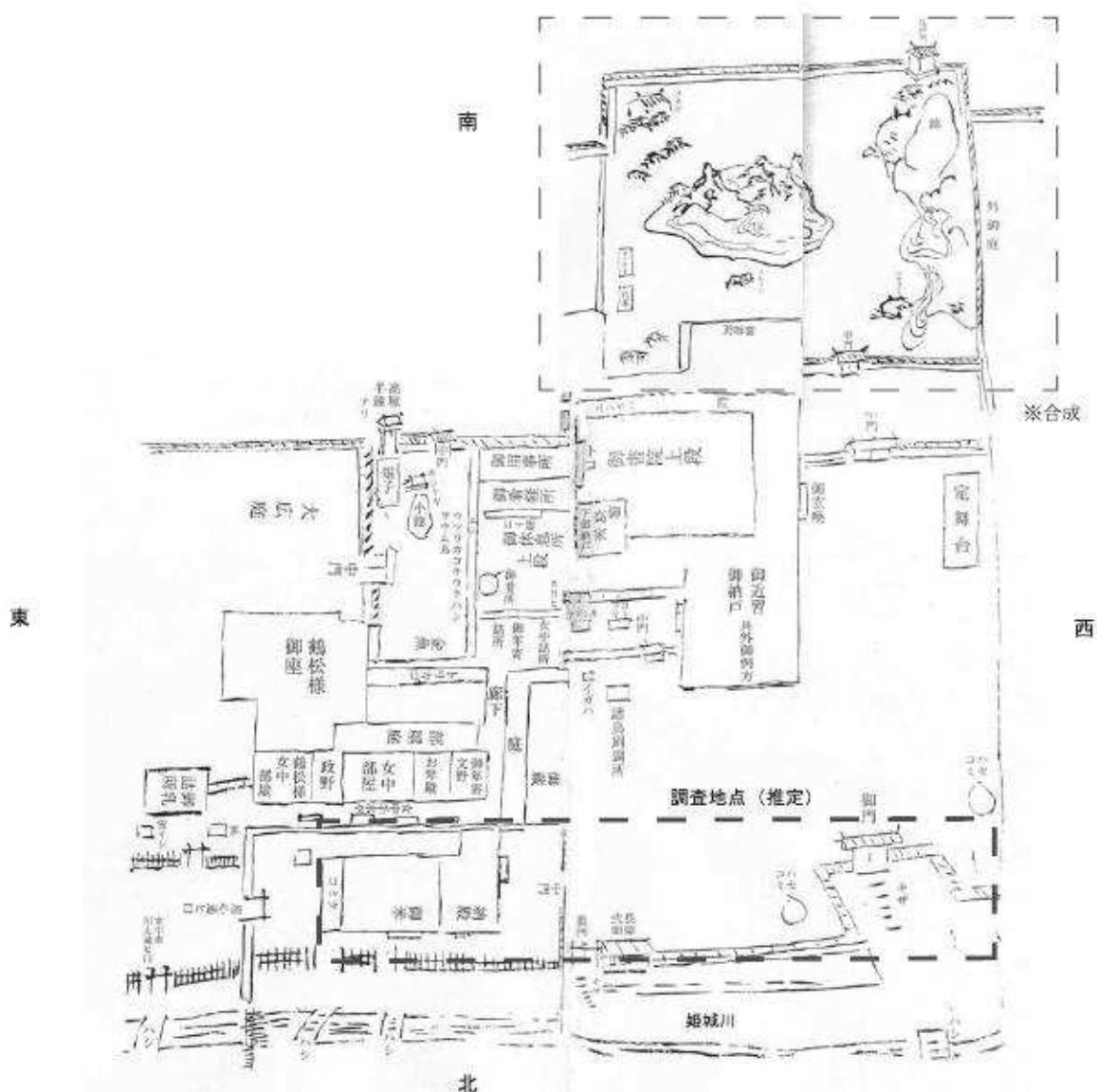
さらに、主に久茂が起居していたと思われる「御休息所」の東にも、「雉子」、「ヲウム鳥」、「金魚」等複数の小動物名が記され、さらにその北側に「トリカゴ」とも記されていることから、この区画でも複数の動物が飼育されていたようである。絵図には、屋敷内の隨所にこれら動植物の名前が描かれており、多くの動植物に囲まれて生活していた久茂の暮らしづくりをうかがい知ることができる。

南御屋鋪全体の敷地は、今回の調査地点よりもさらに南、東西方向に広がっているものと考えられるが、その具体的範囲は他地点における確認調査等が実施できていないため、不明である。しかしながら、絵図と昭和22年に米軍によって撮影された空中写真（第26図）との対比に加え、現在の地籍にも残る地割り痕跡を辿ると、屋敷地のおよその範囲推定が可能である。空中写真には、調査地点よりも西に段丘状のへりが写っており、屋敷地一帯は周囲よりも高い微高地となっていたことが分かる。地域住民の聞き取りによれば、戦後間もなくまで西側の段丘下には小川が流れていたとのことで、これは現在では暗渠化されている。さらに、段丘面と思われるラインを辿ると、南西側に突出するような逆「L」字状となり、これは絵図に描かれた屋敷範囲と重なる。

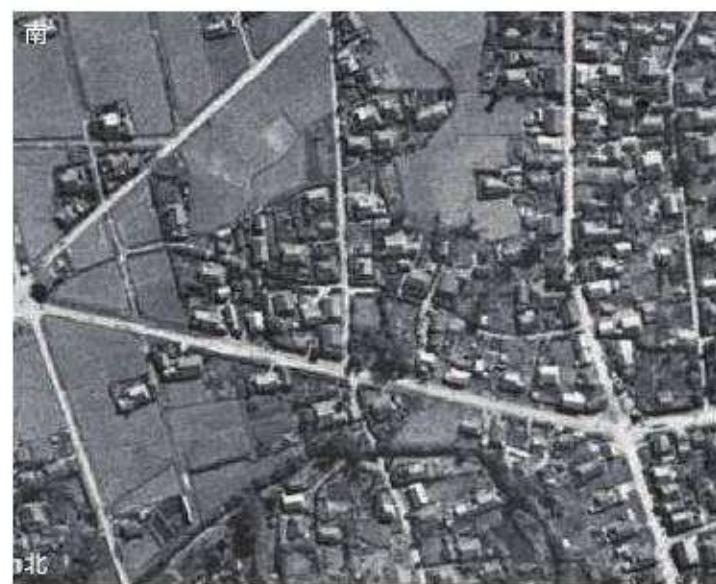
これらのことから、今回調査した範囲は、第25図中に破線で示した範囲の何処かに相当するものと思われる。

さらに絵図によれば、屋敷内から外へと向かう出入口は、正門である御門以外にも裏門、通い口等が複数個所確認できるほか、屋敷地内を区分する塀や柵列にも所々、中門が設置されていることが分かる。

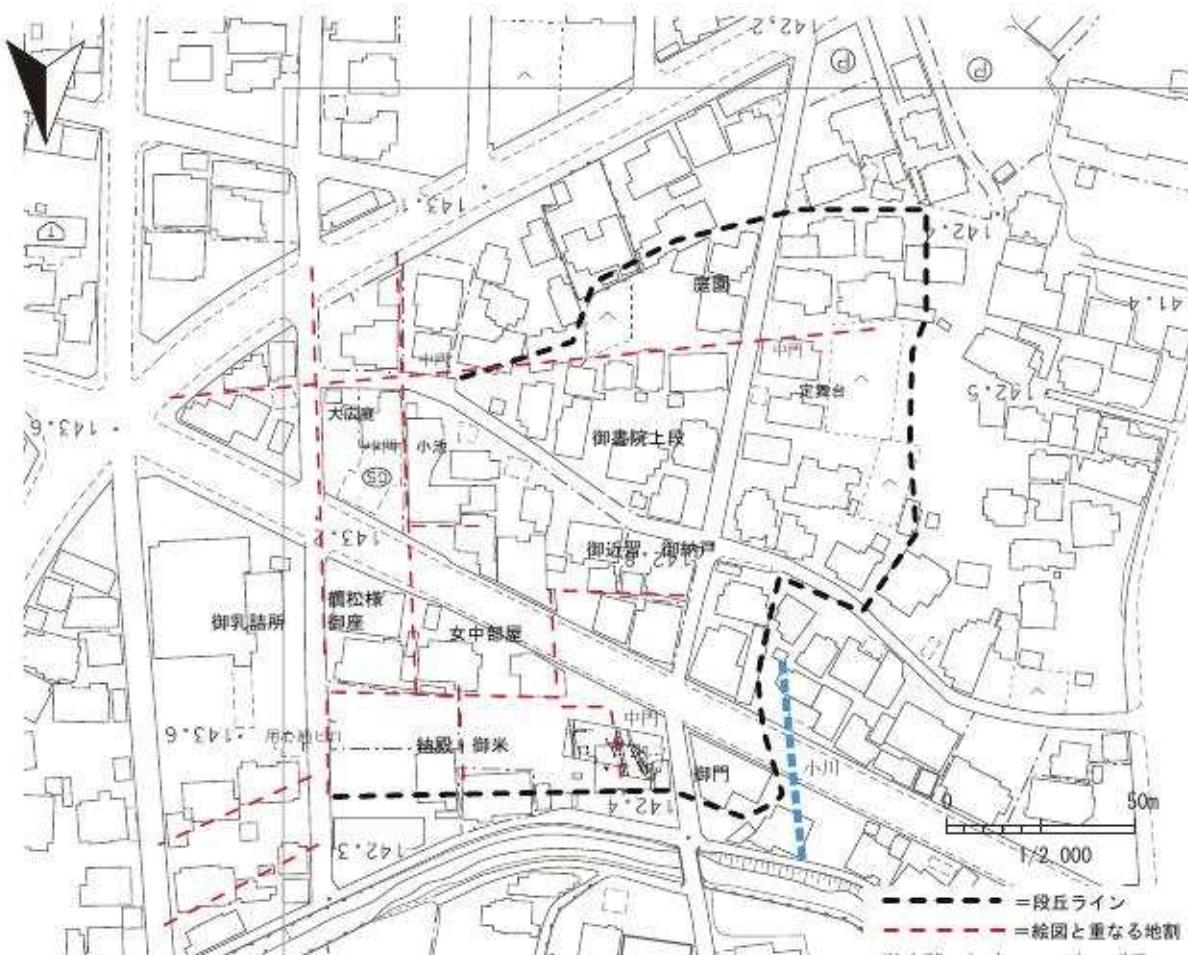
絵図北端に描かれた御門の位置は、現市道あるいはその周辺と考えられる。調査区の西端で検出された階段状遺構SX1がこの御門である可能性も排除できないが、絵図で門は姫城川に向かって開口しているのに対し、SX1は西側に向って降りる構造となり、この点において違いが認められる。また、地理誌には御門の階段が石段で作られていたとの記述があるものの、SX1においてそのような痕跡は認められなかった。



第25図 南之館屋敷図と調査地点の位置関係（庄内地理誌卷26を改変）



第26図 米軍撮影空中写真（昭和22年撮影）



第27図 南御屋鋪跡配置推定図 ($S=1/2,000$)

御門が実際には絵図とは異なり、L字形のアプローチとなる可能性もある。しかしながら、SX1出土遺物には19世紀以降のものも含まれていることから、屋敷廃絶後に作られた遺構である可能性も残されており、本報告中の断定は避けておきたい。

今回検出された遺構配置は、御門よりも東、すなわち式間長屋と近接する裏門、その上にある中門と屏（柵列）が合致しており、その東側から検出されている掘立柱建物跡やピット群は「納殿」、「御米」として描かれている蔵等の貯蔵施設である可能性が高い。

以上を踏まえて、SB2、SB3を南北に延びる屏と中門と仮定した上で、絵図に示された各施設の配置を空中写真、そして過去の地割り痕跡と思われるラインを考慮し、推定したものが（第27図）である。ここではおおまかな配置を捉えたのみで、細かな範囲及び各施設比定の検証は今後に委ねばならないものの、推定でもその敷地面積は1haを超え、最大で2ha近くに及ぶものと考えられる。

18世紀後半に掘削されたと推定されるSD2は、南御屋鋪機能時には暗渠として使用されていたと考えられることから、絵図には描かれなかったものと思われる。SD2は他の溝状遺構に比べ、遺構深度も深く、高い計画性を持って掘削されている。遺構の下層において水成作用に由来する堆積が認められることから、排水溝として機能していたものと考えられ、遺構配置と絵図を照らすと、SD2の南延長上には、主要な建物が並ぶエリアが存在することになる。

このことから、SD2はこの中心部の排水を主目的として掘削された可能性が高い。それは、南御屋鋪が建てられる以前、この地域は水田地帯であり、湿地性で排水に難のある土壤であったことからも理解でき、排水対策を十分講じた上でなければ、館建設そのものが困難であったと考えられる。

南御屋鋪の廃絶について

地理誌によれば、島津久茂はこの地に館を築き、邸内では小筒（鉄砲）、示現流剣術、楽焼、蠟燭つくり等を嗜ん

でいたとされる。地理誌には家中役職の名称、人物名等も列記されており、屋敷内には多くの家臣、女中等が生活していたことがわかる。明和4年（1767）には当時の鹿児島藩主島津重豪が、参勤交代から帰藩する際に都城を訪れており、南御屋舗にいた久茂とも会見している（地理誌卷26）。この時、屋敷内の庭園を案内される等して、大いに感激し鹿児島へ帰ったとされている。剣、砲術に加え動物等、久茂の多趣味振りは都城島津家歴代当主の中でも群を抜いており、このような気風は重豪にも共通するものとされている（米澤2011）。

安永3年（1774）6月21日に久茂が南御屋舗内で没した後、屋敷を引き続き都城島津家、あるいは関連する人物が引き継ぎ、居住していたことを示すような記録はなく、屋敷地がどのような経過を辿ったかは文献史料からは確認できない。しかしながら、調査地点付近の住民からの聞き取りによれば、年代は不明なもの、家臣團に払い下げられ、譲与されたとの証言も得られた。このことは、調査区内から19世紀以降の遺物が出土していることからも肯首でき、調査地点周辺でも近世後期において居住活動が継続していたこと示している。すなわち、南御屋舗は宝暦7年（1757）に久茂がこの屋敷へと移り、死去するまでの17年間が実質的な使用期間と考えられ、以後幕末にかけて都城島津家家臣の屋敷地へと変遷していったものと推定される。このことを傍証するかのように「幕末都城之図」（6頁第5図）では南御屋舗の位置は明示されておらず、既に屋敷地が消滅していることを示している。

屋敷が継続しなかった理由は定かではないが、18世紀半ばから19世紀初頭（文化期）にかけては、宝暦年間の木曽川治水工事に端を発する藩財政悪化が、それまで以上に逼迫する時期にあたり（原口ほか1999）、当然、私領地である都城島津家領も同様であったと考えられる。このことに加え、18世紀後半には台風、洪水に加え、安永8年（1779）の桜島大噴火等の自然災害が頻発していた時期にもかかっており、都城島津家領内でも幾つかの被災記事が確認されている（都城市立図書館1974）。これらの災害復旧にも多額の経費を要していたものと思われ、このことはさらに財政を逼迫させていたものと考えられる。このような状況下では、広大かつ華美な屋敷の維持管理にはコストも要する上、そのまま使い続けければ、當時進められていた藩政改革の流れにも沿わなくなるものと思われ、このことも家臣團の屋敷地へと変遷していった一因として推測される。

これらのことと直接関連するかは不明であるが、地理誌には久茂が没した同年（安永3年）10月、当時の都城島津家家老名で、南御屋舗内に詰めていたと思われる人員や久茂および親族の財産整理が行なわれている記事が多く見られる。この時期から既に屋敷の廃絶へと向けた動きが見られることは注目される。

今後も周辺地域での調査や文献史料の更なる精査が必要である。

【引用・参考文献】

- 大橋康二 1993『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003『雪山道路・猿引道路』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（53）
- 九州近世陶磁学会（編） 2000『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念』
- 原口泉・永山修一・日隈正守・松尾千歳・皆村武一 1999『鹿児島県の歴史』 山川出版社
- 堀田孝博 2013『隣人からみた薩摩流 - 近世日向諸藩における薩摩流流通の位相 - 』『鹿児島考古』第43号 鹿児島県考古学会
- 都城市史編さん委員会（編） 2001『都城市史』史料編近世I 都城市
- 都城市史編さん委員会（編） 2005『都城市史』通史編中世・近世 都城市
- 都城市史編さん委員会（編） 2005『都城市史』資料編考古 都城市
- 都城島津邸 2011『都城のおとさまー都城島津家当主のくらしー』都城島津伝承館企画展図録
- 都城市立図書館 1974『年代実録』
- 宮崎県教育委員会 1996『高岡麓道路』高岡郵便局庁舎新築工事に伴う発掘調査報告書
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2003『八幡道路』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書（70）
- 宮崎市教育委員会 2016『佐土原城跡第6次調査』宮崎市文化財調査報告書（109）
- 渡辺芳郎 2000『宋胡録と薩摩燒宋胡録写 - 考古学資料の検討 - 』『メコン流域の文明化に関する考古学的研究』科学研究補助金研究成果報告書（代表新田栄治） 鹿児島大学法文学部
- 渡辺芳郎 2004『元立院と龍門司 - 加治木・姶良系陶器編年のための作業仮説 - 』『姶良町内遺跡詳細分布調査報告書』姶良町埋蔵文化財発掘調査報告書（9）鹿児島県姶良町教育委員会
- 米澤英昭 2011『都城領主の日常』『宮崎県文化講座研究紀要』38 宮崎県立図書館

写真図版 1



調査地点遠景 南から都城領主館跡（現都城市役所）方向を望む



調査区全景（真上から）

写真図版 2



SD6・SD7断面（調査区東壁）



SB1 西から



SB5 北から



SB2・SB3 北から



SD2・SX1 検出 南から



SD2 北から



SD1・SD3 南から



SX1 土層断面 南から

写真図版 3



SX1 北から



SBI 西から



SX1 下層磁器(17) 出土状況



SC2 南から



SC1 南から



ピット内陶器(124) 出土状況



包含層陶器(129) 出土状況



ピット内陶器(148) 出土状況

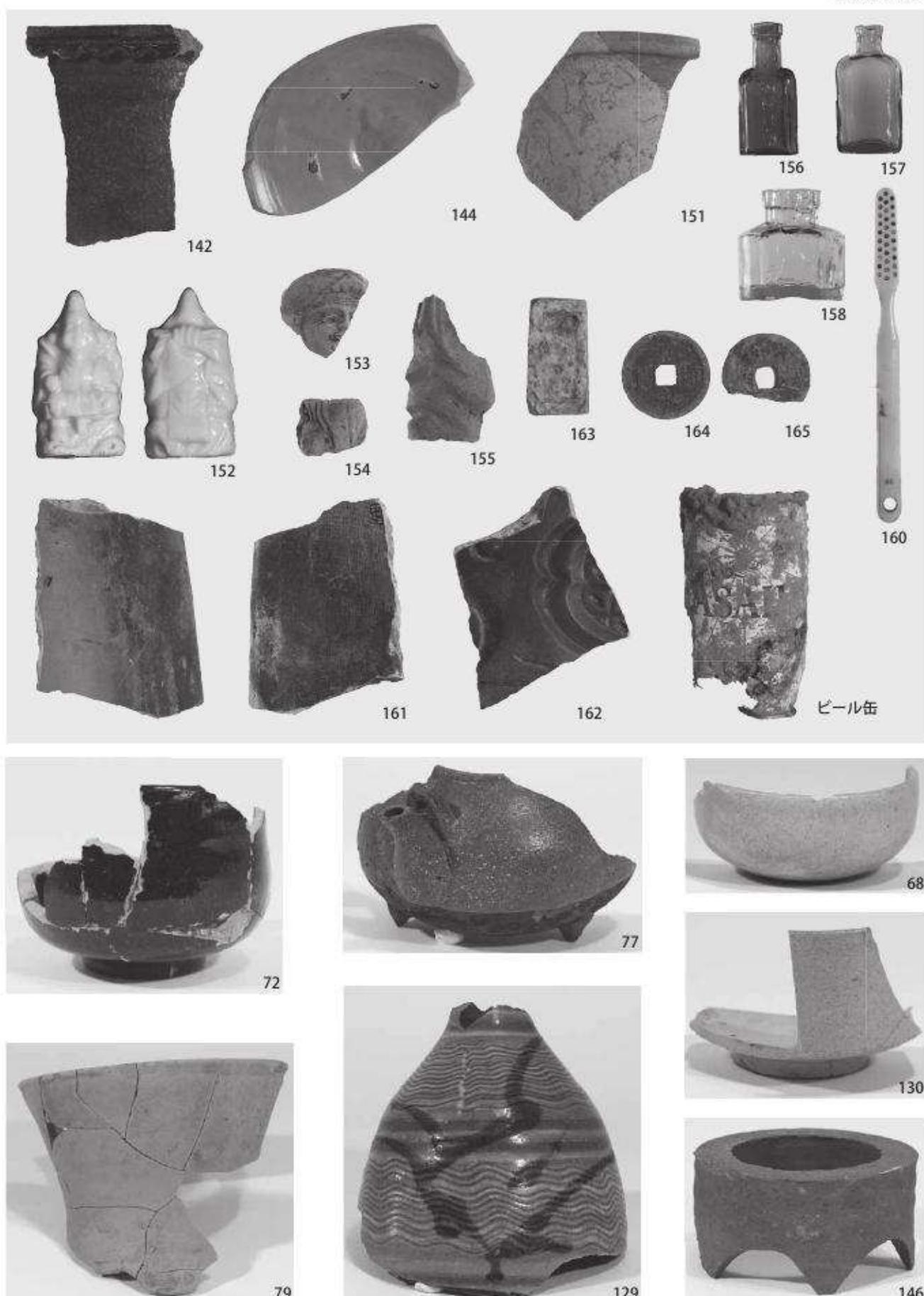
写真図版 4



写真図版5



写真図版 6



報告書抄録

ふりがな	みなみおやしきあと							
書名	南御屋鋪跡							
副書名	民間の集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	都城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第127集							
編著者名	加賀淳一							
編集機関	都城市教育委員会							
所在地	〒885-0034 宮崎県都城市菖蒲原町19-1 TEL 0986-23-9547 FAX 0986-23-9549							
発行年月日	2017年3月25日							
所 収 遺 跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
南御屋鋪跡	宮崎県 都城市 姫城町	45202	M1016	31° 42' 59" 付近	131° 3' 45" 付近	H27.11.16 ~ H28.2.8	295m ²	集合住宅建設
遺跡名	種別	主な時代			主な遺構	主な遺物	特記事項	
南御屋鋪跡	城館	古代 中世 近世 近現代			溝状遺構 階段状遺構 掘立柱建物跡 ピット列 土坑	土師器 貿易陶磁器 近世陶磁 石製品 鉄製品 錢貨		
要約	<p>南御屋鋪跡は、都城市姫城町に所在し、地形的には姫城川左岸の扇状地端部に立地している。</p> <p>南御屋鋪跡は、都城島津家20代当主島津久茂が宝暦年間に築いたとされる隠居屋敷で、検出された遺構の中には18世紀後半以降に作られたものがあり、これは屋敷の一部と考えられる。近世後期に編さんされた『庄内地理誌』絵図との対応関係から、調査地点は屋敷地の北辺付近に相当するものと思われる。</p> <p>出土陶磁器は、在地製品である薩摩焼のほか肥前陶磁がまとまって出土しており、18世紀後半以降のものが大半である。中には堅野窯系白薩摩や三島手等の優品も出土している。このほか、土製品、石製品、錢貨等も見られた。</p>							

